

東学農民戦争，抗日蜂起と殲滅作戦の史実を探究して

—— 韓国中央山岳地帯を中心に ——

井 上 勝 生*

は じ め に

1) 現地調査，討伐作戦の基本方針と武力の問題

一昨昨年（2015）秋10月と11月，また一昨年（2016）春4月，日本軍「東学党討伐隊」の進軍路を韓国の研究者の案内をうけて共同で踏査することができた。日清戦争中の日本軍で「東学党討伐隊」と，あるいは「東学党討滅隊」とも呼ばれた大隊，後備第19大隊，第1中隊第2小隊，その第2分隊の進軍路追跡調査である。

一昨昨年10月の現地調査は，韓国側から東学農民戦争の研究者，^{シンヨン ウ}申榮祐氏と^{ヒョンミョンチル}玄明喆氏，日本側から井上の3名で，^{キョンギド イチヨン}京畿道利川，^{チュンチヨンド カフントンマンニ}ついで忠清道可興東幕里，さらに^{チョンブン ホ}清風湖と呼ばれる巨大ダム湖に沈んだ村落，^{ソンネリ}城内里の戦場跡を踏査した。また翌月，11月，^{ナムオン}南原東学農民革命記念事業会と東学農民戦争の研究者^{パクメンス}朴孟洙氏，地元の研究者，そして井上で^{キョリヨンスンソン}全羅道南原の，日本軍が村落を焼き払った^{バクメンス}蛟竜山城と討伐した南原一帯を中心に踏査した。さらに，一昨年4月に，慶尚道北部の現地調査を行った。この慶尚道調査報告は，次の課題にしたい。

それ以前2011年，徳島県阿波市で日清戦争開戦と同時に徴兵され，後備第19大隊第1中隊の東学農民軍討伐作戦に参戦した一兵卒，後備役上等兵の「従軍日誌」を地元の郷土史家坂本憲一氏の紹介で見ることができた。拙著『明治日本の植民地支配 —— 北海道から朝鮮へ ——』のなかで，その凄惨な戦場の様相を記した一部を「兵士の「従軍日誌」として紹介した¹⁾。

これまで日本軍朝鮮兵站線守備隊司令部（当時，兵站監部）の一連の「陣中日誌」²⁾や東学農民軍討伐隊大隊長の朝鮮政府での作戦後の証言「東学党征討略記」³⁾などが研究者に利用され

*いのうえ かつお 北海道大学

てきた。また近年は、南大隊長が軍司令部に提出した日誌体討伐報告書である「東学党征討経歴書」など⁴⁾が、2008年、南家文書として山口県文書館に寄贈され閲覧できるようになっている。いずれも日本軍の司令部が記録し、あるいは大隊長が提出した軍の公的な文書であった。第2次東学農民戦争の基本史料である。ただこれら軍の公式文書には、戦場最前線の戦いの凄惨な様相の全貌は記されない。

一例をあげよう。日本軍各部隊が、戦時にはかならず記すこととされた「陣中日誌」には、「陣中日誌例式」が決められていた。日誌は、各部隊長が、「点検シ、毎日、記載ノ結尾」に捺印または花押を押し、戦争後、謄写一冊が陸軍省に提出され、抄出を作成、その謄写本が参謀本部の「陸軍文庫」に収蔵された。日誌作成の「目的」は、甲乙の二項あり、「甲」は二つで、一は「後來戦史二用ヒ」であるが、二は「各人ノ任シタル勤務」について陸軍省で戦功「詮衡ノ参考」にするためであった（例式の第三）⁵⁾。上官の点検を受け、陸軍省での戦功審査の資料にされる。そのような「陣中日誌」に、最前線の凄惨をきわめる様相がほとんど記されないのは、予想されることである。その点、討伐部隊に従軍した一兵卒が戦場を一個人の記録として記した「従軍日誌」は、日本でもはじめて紹介された学術的に貴重な資料である。

筆者は、徳島県阿波郡（現、阿波市）の吉野川南岸にある村出身の兵士であった。日清戦争下、第2次東学農民戦争から6年後、1901年1月に親族の助けも得て、巻物に清書された記録である。表題は、「明治二十七年、日清交戦従軍日誌」。長さ、9メートル23センチ、幅、34センチ、墨書された、長大な「従軍日誌」である。「従軍日誌」に記された戦場最前線の苛酷な有様は、それまで公的文書に記されていた第2次東学農民戦争像と大きく異なるものであった。

「従軍日誌」は、歴史の「負の記録」であり、東アジアの歴史の遺産というべきものである。学術研究のために、全文を原文通り公表することが課題であった。ただそのためには、二つの課題があった。

第一は、「従軍日誌」が帰国の6年後に清書されたものであるために、つまり完全な一次史料ではなく、「清書」という作業が入っているので、記されている記述内容が史実を正確に記しているか、確認する必要がある。負の側面の記録という性格もあるゆえに、いっそう史料の内容を確かめる現地調査が必要であった。

第二は、公表に際して所有者側の承諾を得ることであった。「負の記録」は、歴史研究においては「発表すれば終わり」とするべきではないであろう。公表を承諾された所蔵者側は、歴史の学問研究に対して見識のある理解を示されたのである。所蔵者側関係者の理解を得られれば、さらに深い学術的な探索を今後も進展し得るのである。こうした所蔵者側の見識に対して感謝を申し上げたい。

とりわけ重要なのは、第一にのべた記事の裏付けである。韓国の現地踏査の前には、徳島県

阿波郡の徴兵された兵士が、讃岐山脈を越えて香川県へ入り、部隊編成地の松山市へ向かい、戦争が終わって朝鮮から松山市へ帰還し、ふたたび香川県を縦断して阿波郡へ帰郷する日記記述を裏付け調査した。地元阿波郡（現在の阿波市）の郷土史家坂本憲一氏の助力をいただいた。一方、松山市では、日本コリア協会愛媛（事務局長、柳瀬一秀氏）が中心になって現地を訪ねる裏付け調査が行われた。

松山市は、日清戦争時に四国4県から出軍する日本軍部隊の編成地である。現地調査には、日本コリア協会愛媛の柳瀬一秀氏、尾上守氏、佐々木泉氏、漢那朝正氏、愛媛近代史文庫の富長泰行氏ら、井上も一部参加した。この調査について柳瀬一秀氏は、「東学農民軍殲滅に徴用された二人の『従軍日誌』における『松山の足跡』⁶⁾を地元の研究誌にまとめている。

徳島県阿波郡と愛媛県松山市での現地調査の成果の要点だけを坂本氏や柳瀬氏らの教示を参考にして紹介しよう。くわえて兵士が仁川からソウル市へ入る部分について、韓国の研究者玄明喆氏の案内をいただいた調査も記す⁷⁾。

「従軍日誌」筆者兵士が応召後、吉野川を北岸へ渡った「源太渡し」は、現在、吉野川中流の阿波中央橋の下手、北岸に「史跡源太渡し跡」の石碑が建っている。阿波の脇町から高松市へ讃岐山脈中央部を北へ越えて行く「曾江山越え」も残っている。

筆者の兵士は、松山市で後備第19大隊第1中隊第2小隊の第2分隊に配属された。この第2分隊は、「松山市港町三丁目正安寺」を宿舎とした。正安寺は、湊町4丁目に現存する浄土宗寺院である。戦前は同町3丁目を本体として800町歩の寺域を持っていた正安寺は、今、湊町4丁目部分だけを残している。筆者兵士は、宿泊初日、炊事場の設けがなく、「長町三好亭にて夕食」をとる。長町は、のちに湊町に町名が変更される。柳瀬氏は、ちょうど日清戦争時に刊行された『商工案内松山名所普通便覧』（近藤貞利編、1894年、近藤南岳発行）の店舗一覧「麺類」に、湊町2丁目の三好彦四郎という店名を見出された。第2分隊の宿舎正安寺湊町3丁目の隣り丁である。当時の店舗一覧を通覧して、隣の町内の三好彦四郎、「麺類」店が兵士たちが夕食をとった「三好亭」の可能性が高いと推定された。

朝鮮から帰って上陸した三津浜港の「久保田汽船問屋」は、『商工案内松山名所普通便覧』に「汽船荷客取扱所並に旅館広町窪田回漕店」が記される。窪田回漕店は、他の資料『三津浜誌稿』（三津浜郷土史研究会、1960年）などでは、「久保田廻送店」と記される汽船の乗り場である。松山市で宿泊した葭町の大林寺は、松山城の西隣りに現存しており、松山城主の菩提寺で、かつて広大な境内があった⁸⁾。その後、香川県の琴平から讃岐山脈西端を越える「箸蔵越え」が今もあり、池田から吉野川を船で下って着岸、南岸に上陸する「川嶋岩の鼻」は、今JR徳島本線阿波川島駅近くの川嶋城跡に、景勝地「岩の鼻」展望台が築かれており、南岸から吉野川と阿波平野、讃岐山脈を一望することができる。帰還を村で祝った陣後（地名）の「寫禎」は、もと地元で知られていた老舗料理屋で、坂本氏と訪ねると、現在は子孫が営んでいた島野

外科病院（休院中）が跡地にあった。

またソウル市踏査は、玄明喆の助力で行い、^{マルリ}万里倉^{チヤン}の跡——今「万里倉跡」のプレートが道路脇に設置——、現在の^{ヨンムンドン}龍門洞を出て、^{ヒョンチヤン}孝昌公園へと登って万里峠の長い丘を越え、坂道を下って今のソウル駅に近い^{チョンバドン}青波洞に降り、^{スンネムン}崇礼門、^{チョンガク}鐘閣（^{ボンガク}普信閣）、タップコル公園の十三層塔へと筆者兵士がたどった、一日の見物としては十分の行程を確かめた。崇礼門、鐘閣、十三層塔は、現在もソウルの代表的な名所である。こうして「従軍日誌」は、国内の部分、およびソウルの部分において、正確に記載されていることを現地調査で確かめることができた。

なおこの調査を以下で検証する際に、日本軍の討伐作戦の基本方針と武力の問題について、不可欠な前提となる二つの点に限定して、簡略に確かめておきたい。ついで第三に、第2次東学農民戦争について、「分捕られた文書類」というテーマで第2次東学農民戦争史料の残存状況の問題点について述べよう。

第一は、東学農民軍を討伐する際の、日本軍の討伐基本方針である。日本軍大本営は、10月下旬に、知られているように、討伐基本方針にかかわる重要な命令を出した。10月27日夜、^{インチョン}仁川南部兵站監が受信した大本営の川上兵站総監電報である。「川上兵站総監より電報あり、東学党に対する処置は厳烈なるを要す、向後悉く殺戮すべし」と。この広島の本営からの命令は、東学農民に対して、厳しく激（烈）しくせよと、またこれから「ことごとく殺戮」すべし、という明確な命令である。1982年、熊本の朴宗根氏『日清戦争と朝鮮』ではじめて紹介された重要な電報であった⁹⁾。

朝鮮に居た日本軍守備隊が、実際にこの大本営命令を実行したことは、拙著『明治日本の植民地支配』などで紹介した¹⁰⁾。たとえば翌28日、^{キョンサン}慶尚道^{ノクトン}の洛東兵站司令部が、捕らえていた東学農民軍2人について、2人は指導者とも思われないのだが、洛東部で斬殺して然るべきか、という確認の問い合わせをしたのに対して、南部兵站監部は、「東学党斬殺の事、貴官の意見通り実行すべし」と答えていた¹¹⁾。このように仁川兵站監部の方針は、東学農民軍に対して「厳酷の処置は固より可なり」¹²⁾であり、大本営のこの「ことごとく殺戮命令」は、その後も取り消されることはなかった。

大本営「ことごとく殺戮命令」の後、十三日後の11月9日、仁川兵站監（軍部）が日本公使館（外交部）と合議して、討伐作戦に出軍する直前の後備第19大隊へ出した「訓令」の第一条は、次のようである¹³⁾。なお同大隊は、のちに見るように、訓令が出た二日後、11月11日にソウルから討伐作戦に出軍するのであった。

一、東学党は、目下、忠清道^{チュンジュ}忠州^{クェサン}、槐山、及び清州^{チュンジュ}地方に群集し、なほ与党は、全羅・忠清両道所在各地に出没するの報告あるを以て、その根拠を探究し、これを^{そうぜつ}剿絶すべし

「剿絶」は「ほろぼしつくすこと。根絶やしにすること」（『広辞苑』）である。「根拠を探究し」て「滅ぼし尽くすべし」という訓令である。このように大本営が命令した「ことごとく」殺戮命令は、この訓令第一条でも変わっていない。また第二条の、冒頭と後半には、次のように記される。

二、朝鮮政府の請求に依り、後備歩兵第十九大隊は、次項に示す三道を分進し、韓兵と協力し、沿道所在の同党類（東学農民軍）を撃破し、其禍根を勦滅し、以て再興、後患を遺さしめざるを要す。……尤も脅従者に至ては、緩急其度を計量し、その従順に帰するものにては、これを寛恕し敢えて苛酷の処為に陥るを避くべし

この第二条の前半、「韓兵と協力し」の部分について、第二条の但し書きは、次のように記している。「三路より既に出発し、もしくは将来出発すべき韓兵の進退は、総て我（日本軍の）士官より指揮命令すべし」と。日本軍士官が朝鮮政府軍兵士を指揮するのである。日本軍の朝鮮政府軍に対する指揮権保持は、以後の検証のためにも確認しておこう。第二条の3道分進のあとに記されている「撃破」、「勦滅」文言は、「再興」（再起）できないように「後患」を残すな、つまり残党を残すなど命令されており、やはり東学農民軍の根絶そのものである。

上の引用の後半部分には、東学農民軍への「脅従者」は、「緩急其度を計量」、つまり手加減を加えて、「従順に帰するもの」は寛恕し「敢えて苛酷の処為に陥るを」避けるようにと記される。一読して東学農民軍に対する寛大な対処を命令するようにも思わせるのだが、あいまいにしないように正確に読む必要がある。

「敢えて苛酷の処為に陥るを避くべし」は、独立した文言ではなく、一は、「脅従者」、強いられた農民軍参加者——実際に強いられて参加したものから、処刑を免れるための口実までその実態はさまざまであろう——と、二は、「従順に帰するもの」、つまり東学農民軍から脱落したものとの二つを対象にする文言である。日本軍に対する抗戦を持続している、現に蜂起に立ち上がっている東学農民軍たちを明確に対象から除いた文言である。したがって東学農民軍に対する、「ことごとく殺戮命令」や「剿絶」、「勦滅」、つまり根絶討伐命令の原則をあくまで維持した上での、農民軍から脱落する、あるいは脱落した農民などへの「寛恕」という範囲のものなのである。この後半は、現に蜂起している東学農民軍への「苛酷の処為」をあらためて確認させるものとすら言うべきであろう。討伐大隊の指揮官たちは、戦場でこの訓令を正確に読んでいたに違いないのであり、訓令の勦滅方針の正確な読み方を確認したのである。ただこの勦滅の基本方針と、「寛恕」を加える範囲の問題は、以下に見る、後備第19大隊の討伐作戦の実際の展開のなかであわせて検証すべきものであろう。

また冒頭で、「朝鮮政府の請求に依り」、後備第19大隊の3中隊が出軍すると記されている

が、文言の通りであるならば、朝鮮政府が日本外交部や軍部に事前に、大隊派遣あるいは東学農民軍殲滅を要請する文書を出したはずである。しかし『駐韓日本公使館記録』、「南部兵站監部 陣中日誌」など、かなり残存する日本外交部や軍部の記録に、そのような重大文書はどこにも存在を確かめられていない¹⁴⁾。

第二に、日本軍守備隊や討伐隊が携えていた小銃の性能の問題について、第2次東学農民戦争像の基本にかかわるのであらかじめ指摘しておきたい。

スナイドル銃は、1853年に開発されたもので、ライフル銃としては、ミニエー銃のつぎに古い。日本軍後備部隊の歩兵は、このスナイドル銃を携えていた（参謀本部編纂『明治二十七八年日清戦史 1』¹⁵⁾）。対して、日本軍正規軍である常備兵は、村田銃を持っていた。村田銃は1880年に日本で開発された。このようにスナイドル銃は村田銃より27年前、イギリス開発であった。アメリカ合衆国南北戦争（1861-65）でもちいられた中古スナイドル銃が、幕末維新期に欧米外商によって高価をつけて日本に持ち込まれ、戊辰戦争（維新の内戦（1868-69））で使われ、村田銃以前、日本軍の採用する小銃になっていたことは周知のことであろう。日本軍、朝鮮兵站部守備隊や東学党討伐隊が、『明治二十七八年日清戦史 1』が指摘するように、旧式になっていたスナイドル銃をもっていたことは、「南部兵站監部 陣中日誌」の各所にスナイドル銃弾丸の補給記事が散見されることから確かめることができる。たとえば11月30日、公州戦争の激戦を戦っていた仁川兵站司令官は、南部兵站監の名義で「スナイドル銃弾薬十万発」という大量の弾丸を馬関首砲廠へ直接請求した（「南部兵站監部 陣中日誌」11月30日¹⁶⁾）。ただし、ソウル守備に派遣された後備第18大隊には、ソウルが「諸外国人の輻輳地」であり、朝鮮兵への「模範」という意味からスナイドル銃を携帯するのは「心苦しき点なきにあらず」と、同大隊に限り村田銃を携帯させたのである（陸軍省「明治二十七八年戦役日記」明治27年10月21日兎玉次官命令）。後備第18大隊が後備兵で例外的に村田銃を持ったことは、『明治二十七八年日清戦史 第八卷』にも記されている¹⁷⁾。後備第18大隊の一中隊は、井上馨公使の指示によってソウルから東学農民軍討伐に派遣された。展開した東学農民軍の討伐部隊は、このような後備第18大隊の一部の例外を除いて兵站線守備隊の後備兵部隊であったから、旧式ライフル銃であるスナイドル銃で東学農民軍を討伐したことが、確実である。

スナイドル銃の「最遠射距離」は1800メートル、一方、村田銃の同距離は2400メートルであった（『明治二十七八年日清戦史 1』¹⁸⁾）。射程距離のちがいは小さいものではないが、小銃実物を観察すると、スナイドル銃は、発射装置もパークッションロック（火打石）式であり、弾丸装填も後装式になっていたとはいえ、銃身後部の上部にある装填用蓋を手で開閉する素朴な古式なのである¹⁹⁾。それでも戦場では、東学農民軍と戦った日本軍は、百名規模の兵をもって数万の農民軍を常に圧倒した。

スナイドル銃が村田銃にむしろまさる「恐るべき銃」であることを、徳島県の日本の古銃の

歴史の専門家であり、スナイドル銃や火縄銃など古銃を実際に射撃もして調査している銃砲史研究者、坂本憲一氏から教えられた。これは、古銃の研究者の間では周知の事という。スナイドル銃の口径は14.9ミリであり、村田銃の口径は11ミリ、ちなみに現在の小銃は5ミリ強なのである²⁰⁾。ライフル銃は、銃身内部にらせん状の溝（ライフル）が施条されており、円錐形の弾丸がジャイロ回転して直進、命中率が飛躍的に高まる。ところが、同じライフル銃でも、スナイドル銃の弾丸口径は、約15ミリと大きい。断面積差は口径長さの差の二乗であり、スナイドル銃弾丸は村田銃弾丸の2倍の太さ（断面積）があり、弾丸頭部もきわめて鈍い円形で、弾丸重量は、スナイドル銃31グラム、村田銃27グラムとスナイドル銃弾丸の方が重い²¹⁾。村田銃弾丸より重く、かつ倍の太さがあり、しかも先端部が平坦に近い鈍角のスナイドル銃弾丸の破壊力は、実はすさまじかったのである。命中すれば直入し、骨を砕いた。スナイドル銃は、北海道博物館に良好な状態で保存されている。



北海道博物館所蔵 為岡進撮影

写真1 スナイドル銃と装弾・点火装置

写真1を掲げた。銃身は太く、パークッションロック式という旧式の点火装置が分かる。一方、マスケット銃にはない照尺（照準器）が付いている。

アメリカテレビ局が行ったスナイドル銃発射実験ビデオを坂本氏に見せていただいた。牛の大腿骨も空中に粉碎、大腿部は跡形もなかった。後備第19大隊の戦闘報告では、400メートルに引きつけての一斉射撃が基本的な戦法である。スナイドル銃は、「百発百中」であった。「敵は先を争ひ乱進、四百米突に來れり（東西北の三方面—原注）我隊（第2中隊赤松少尉分隊）始めて狙撃をなし、百発百中実に愉快を覚へたり」（『海南新聞』1895年1月20日、町田軍曹の郷里あて書簡²²⁾）である。

もしライフル銃どうしの戦いであれば、スナイドル銃は、射程距離、命中率ともに村田銃に劣っており、互角の戦いは不可能である。村田銃と同時代の欧州軍採用ライフル銃も口径は10ミリから11ミリであった²³⁾。口径が小さくなれば、第一に射程距離は確実に能力を高める。

しかしスナイドル銃は、東学農民軍が相手であった。東学農民軍が主に用いた火縄銃の有効射程距離は、100メートル、あるいは80メートルと言われ、スナイドル銃の「百發百中」の有効射程距離の、実に四分の一以下にすぎなかった。日本兵は、徴兵された兵であり、十分に訓練されており、携える銃が口径14.9ミリの、「恐るべき銃」であったのである。火薬も無煙ではなく性能が落ちるので、かえって弾丸（鉛弾）が灼熱され、火傷や鉛毒がひどいという（坂本氏）。スナイドル銃は、手足のどこかに当たれば、手足そのものが吹き飛んだ、体に当たれば大穴が開いて骨が粉碎されて内蔵がとびだし、傷口は焼けただけ、頭部に当たれば頭部全体がくだかれた。

聞慶^{ハンギョン}兵站司令部守備隊の分隊長（軍曹）は、郷里の知人宛書簡で「元来、東学党の如きは我日本人一人にて二、三百人を以て適合せり」（『徳島日日新聞』1895年1月9日2面）²⁴⁾と知らせた。戦場において実際に1対2、300の差であった。銃身内部にライフル（ラセン）を刻んだ大口径の「恐るべき銃」を携え、しかも訓練された日本軍は、東学農民軍との射撃戦では、死傷はまずしないという戦闘力格差の上で戦い、東学農民軍は、戦闘力がはるかに、破滅的なほどに劣勢という状況に直面しながら、数千、数万という結集によって日本軍と戦った。

大本營の東学農民軍「ことごとく殺戮」という原則を、日本軍の討伐隊や兵站守備隊が維持しているということ、また、日本軍の同隊後備兵士の携えるスナイドル銃が、旧式ではあるが、正規軍兵士の携える村田銃より、はるかに大口径の、殺傷力においてむしろ「恐るべき銃」であることを、ここでは確かめて、実際の戦場を一兵士の「従軍日誌」を中心にして検証しておきたい。数十人の日本兵が数千人の農民軍を制圧したのである。

次いで、第三の「分捕られた文書類」というテーマについて、検証の大前提になる事柄であり、重要な問題であるので、節をあらためて見ておこう。

2) 分捕られた東学農民軍文書

「文岩^{ムナム}・梁山^{ヤンサン}付近戦闘詳報」は、忠清道^{チョンソン}青山縣において、当時「東学党討伐隊」と呼ばれた日本軍後備第19大隊所属の小隊が北接東学農民軍と戦った報告である。

1894年12月2日、日本軍に忠清道青山縣文岩^{ムナム}邑が東学農民軍の根拠地であり、「首魁^{チェボ}崔法軒^{ボク}、潜居す」という情報が届いた。「首魁崔法軒」と記される人物は、北接東学農民軍の第一の指導者であり、東学第2代教主でもある崔^{チェ}時^シ亨^{ヒョン}である。それで後備第19大隊所属の小隊は、斥候隊を文岩邑に派遣した。上の「戦闘詳報」によれば、斥候隊は次のように小隊へ戦闘状況を報告した²⁵⁾。

文岩邑は、青山より西南一里許りにして、戸数八十餘、邑民はことごとく家財諸道具を山の上下に遺棄し周章遁逃せりと。尚、斥候は東徒三名を捕し、首魁の書類若干を蒐集し帰

還す。捕虜の言に依れば、法軒は同十二時過ぎ逃走せりと

文岩邑は、青山縣の西南1里（日本の里）、約4キロであった。この崔時亨は、午後12時——深夜0時を指す——逃走した。斥候隊が、崔時亨の「書類若干」を蒐集したという。「蒐」は、「探し集める」である。文岩邑は、山中の盆地である青山の南方約4キロで、錦江の支流報青川^{ボチヨンチヨン}を越えて、山岳を南行、峠（標高約400メートル）へと登る文字通りの山村である。崔時亨の隠れ家の一つであり、北接東学農民軍の起包（抗日蜂起）は、この地で決せられたのであった²⁶。斥候隊は、村を襲撃し、最高指導者の書類を探し集めたのである。この文岩の位置を後掲の地図5に記入した。

また愛媛県の『宇和島新聞』（1895年2月7日）に掲載された「朝鮮私信」は、この斥候小隊一兵卒の従軍記（郷里への書簡）である。上の崔時亨の隠れ家襲撃の様子を次のように報じた²⁷。

青山に着や、兼て南一里、文岩に東徒の首魁、法軒なるもの潜伏し居る事を聞知し居りたれば、桑原少尉、二分隊を卒ひてこれに向ふ。彼等すでに我隊の青山に来るを知り、逃走を企て居りたれば、これを追撃して文書類二行李、牛馬十頭を分取り、その夜、また文岩を夜襲したれど、東徒一人も居らず、依り^(ママ)火を放ちてこれを灰燼とし……

夜襲した日本軍は、邑内に東学農民軍を発見できず、火を放って文岩邑を灰燼にした。ちなみに先の「戦闘詳報」に、文岩邑は「戸数八十余戸」と記されていた。「灰燼」は「灰と燃えかす」であり、文岩邑を焼き尽くした。このような討伐が、あとで見ると、日清戦争中、朝鮮各地の村々で日本軍によってなされていた。ところで崔時亨隠れ家の書類について、先の「戦闘詳報」で「書類若干」と記されていたのだが、上の一兵卒書簡では、数量、「書類二行李」と記されている。当時の軍用行李は、大型トランクの大きさがあり、行李二つといえ、相当な量の崔時亨文書であろう（軍用行李は、南小四郎少佐が使用したものが、今、山口県文書館に、南小四郎文書とともに所蔵されている）。

小隊長桑原少尉は、蒐集したこの崔時亨文書を日本公使館に送付したと知らせる手紙で、次のようにも記す²⁸。

本月三日、首魁崔法軒を文岩邑に襲ひ候際、分捕の書類ならびに、同八日、清州にて東徒数万より分捕たる書類、相合して御送付致候

文岩で蒐集した崔時亨文書とともに、衝撃的なのだが、清州東学農民軍「数万」から分捕つ

た書類も、ともにソウルの日本公使館へ送られたという。この斥候隊の行動は、どうしておこなわれたのか。

こうした文書の分捕りと送付に関連して、先に見たソウル出発時に東学党討滅大隊、後備第19大隊にあたえられた訓令の第2条は、実は、次のように命令していた²⁹⁾。

……尚ほ、同党巨魁（東学農民軍指導者）等、往復書類もしくは政府部内の官吏、地方官、或は、有力の筋より、同党へ往復したる書類は、勉めてこれを收拾し、併せてこれを公使館に致すへし……

東学農民軍指導者の書類蒐集、分捕り、そして公使館への送付は、このように日本軍兵站監部の訓令を受けて遂行された作戦行動の一つであった。東学農民軍指導部の書類分捕りは、各地で組織的に行われたのである。

それゆえに、書類の分捕りは、本稿で見る徳島県一兵士の「従軍日誌」にも何か所か記されている。一例は、部隊が南海岸部にいた1895年1月12日の日誌である。

同十二日、八時三十分、第二分隊は、^{ウオリムドン}月林洞（^{チヨルラナムドチャンフン}全羅南道長興）にある大接司^{イボボン}李法軒の家屋搜索として分遣す。……月林洞に至るや、李法軒の家宅に着し、見るに風を喰ひ該人遁走して不在なる故、秘密の書類若干を得、家屋に火を放ち、捨て在る牛馬を六頭分捕り……

韓国南海岸部の府、長興の大接司、指導者李法軒の「秘密の書類若干」を収集し、農民軍指導者の家屋を焼き、牛馬も分捕ったという。ここでは東学農民軍指導部のある程度まとまった機密書類を見出し分捕ったのであろう。

東学農民軍指導者書類の分捕りは、ソウルより北部の^{ファンヘド}黄海道——現在の北朝鮮の西南部地方、東学農民軍が激しく蜂起した——における東学農民軍討伐隊にも命令された。農民軍書類の分捕りが広範な地域で行われた一証として掲げよう。11月27日、南部兵站監部（この時期、^{オオンドン}漁隠洞へ移転していた）の訓令が、黄海道各地の兵站司令部と隊長たちへ出された³⁰⁾。

東学党を鎮圧するに方り、成へくその巨魁（指導者）を捕縛し、彼等の所持する緊要の書類を押収する事を勉め、右書類は、直に京城（ソウル）井上公使に宛、送付し、その写を当地（漁隠洞兵站監部）に廻すへし

黄海道東学農民軍指導者の重要書類を押収し、ソウルの日本公使へ送付せよ、という訓令で

ある。なおこの訓令は、次の日本公使井上馨要請文のように、井上公使が兵站監に電報で要請したことにより出されたものである³¹⁾。

黄海道に於ける東学党征討のため出兵の義、山縣大将（山県有朋、日本軍第一軍司令官）より貴官（福原南部兵站監）へ命せられたる趣、承知せり。就ては、該巨魁（東学農民軍指導者）を捕縛し、書類を押収する事必要なれば、なるべくこれを務め、しかして捕縛または押収の上は、取調のため、当館（日本公使館）へ送付せられたし。彼方（東学農民軍指導者）の所有せる書類の内、大院君、李^{テウオンゴン}峻^{イジュニョン}鎔、または王妃の筋より送らるものこれあるべしと存するに付、特に注意して押収あらん事を望む。

日本公使館が、東学農民軍指導者書類の押収に努めたのは、先に見た南部兵站監部の訓令第2条や、この井上馨公使の要請文に記されるように、東学農民軍指導者たちの「往復書類もしくは政府部内の官吏、地方官、あるいは有力の筋より、同党へ往復した書類」また大院君やその一族である李峻鎔、「王妃」（^{ミョンソン}明成皇后）と東学農民軍指導部と連絡した書類があると推測したからである。

押収対象になったのは、一つは、東学農民軍指導者の往復書類である。しかも日本公使館は、大院君やその一族、王妃と東学農民軍の関係を示す書類を求め、また注目すべきことにもっと広範囲に「政府部内の官吏、地方官」など、政府の官吏や地方官とも東学農民軍との関係を示す書類があるものと推測し、文書類を求めていた。

こうして日本公使館は、日本軍に東学農民軍指導部の指導部間や政府各層との往復書類を徹底的に大量に分捕らせた。上にあげた事例はその一端である。こういう日本軍の押収の際に、関連して東学史関係文書も分捕られたであろうこと推測に難くない。

今、分捕られた東学農民軍指導部書類のわずかな一部が、防衛研究所図書館の史料「東学党の状況」³²⁾や外交史料館の史料集「韓国東学党蜂起一件」³³⁾などに写されて残されている。しかしわずか数通でしかないのである。東学農民軍指導者たちの文書類は、日本公使館に分捕られたあと、なくなってしまったか、あるいは今も行方不明なのである。

第2次東学農民戦争について、日本に、日本軍や日本外務省側の史料は、ある程度、残存している。しかしこれもある程度という範囲である。

たとえば朝鮮に配置された日本軍兵站部司令部、「南部兵站監部」の「陣中日誌」は、現在、東京都市ヶ谷にある防衛省防衛研究所図書館に3冊保存され公開されている。一冊目は表題「第五師団中路兵站監本部 陣中日誌」、二冊目と三冊目は「南部兵站監部 陣中日誌」で、それぞれは、7月28日から10月4日、10月5日から11月9日、11月11日から12月31日の日誌であり、第2次東学農民戦争に関連する重要な基本となる記事が記されている³⁴⁾。1894

年の秋から冬まで日誌が残存している。しかし日本軍の討伐戦が、とくに苛酷に展開した1895年に入ってから春期の兵站監部「陣中日誌」は、今見ることがない。

検証のために、次の点を付け加えておこう、防衛研究所図書館には、表紙に「明治二七年十二月 二七、一二、一～二八、八、二〇 陣中日誌 南部兵站監督部」と記された兵站監督部「陣中日誌」が所蔵され目録も載っている。同図書館の出納整理番号は「兵站部・日清戦役・陣中日誌・M27～32・177」で、明治27年の南部兵站監部「陣中日誌」に続けて整理番号が付されている。縦横の大きさ、表紙の体裁からも、兵站監部つまり兵站司令部の1894年「陣中日誌」に続く1895年冬期から春期、さらに夏期にすらおよぶ司令部の日誌とも見えるが、実は、1894年の兵站監部「陣中日誌」にも、南部兵站「監部」と南部兵站「監督部」の二系統の「陣中日誌」がある。日誌の内容を一見すると分かるように、兵站監督部は、司令部ではなく、兵站事務方なのである。兵站監督部の業務は、兵站監部のそれとはまったく違う。記されているのは、物資や人夫、兵站人事の件などである。しかも上の日誌は、デジタル（アジア歴史情報センター）情報——公開されているデジタルは白黒写真である——によるのではなく、原本そのものを閲覧すると分かるが、「陣中日誌」としては異例なことに鉛筆書きで、八ヶ月に及ぶのに全46丁の簡略なものであり、上に紹介した表紙の「二七、一二、一～二八、八、二〇」という記入も鉛筆書きである。もともとの表紙タイトルは、単に「明治二七年十二月陣中日誌 南部兵站監督部」なのである³⁵⁾。東学農民軍討伐作戦がもっとも激烈な様相を示す1895年春期の兵站監部、つまり司令部の「陣中日誌」は、今まちががなく欠けている——皆無なのである。

また現在まで、日本軍の討伐作戦の中心になった後備第19大隊長、南小四郎少佐の「東学党征討略記」は、総指揮官である大隊長が進軍した忠清道中路から、同大隊全軍他が合同して進撃した全羅道南部の討伐作戦にたどりつく作戦全体を証言した貴重な文書として、研究でもよく利用され叙述の典拠として依拠されている³⁶⁾。大隊長の証言は、朝鮮政府のなかで総理大臣も臨席して行われたものである。ところが本稿でも検証するように、討伐作戦がとくに苛酷に、凄惨に展開したところについて、大隊長は証言していない。討伐作戦の現地での責任当事者である大隊長が朝鮮政府の前で、朝鮮政府にとって公式には「賊」であったとはいえ、苛酷をきわめた討伐作戦を証言する場合、史実の通りに証言したかどうか、これは、あとで実証的に検証するように、とりわけ重要な部分において、きわめて疑わしい。

第2次東学農民戦争の研究には、消し去られた史実を、わずかに偶々残された史料から再現しなければならぬという、大きな困難がともなっている。この事を、確認しておく必要がある。

I 利川から城内里へ —— 見いだされた戦場の街と村 ——

1) 利川市（京畿道）の現地調査

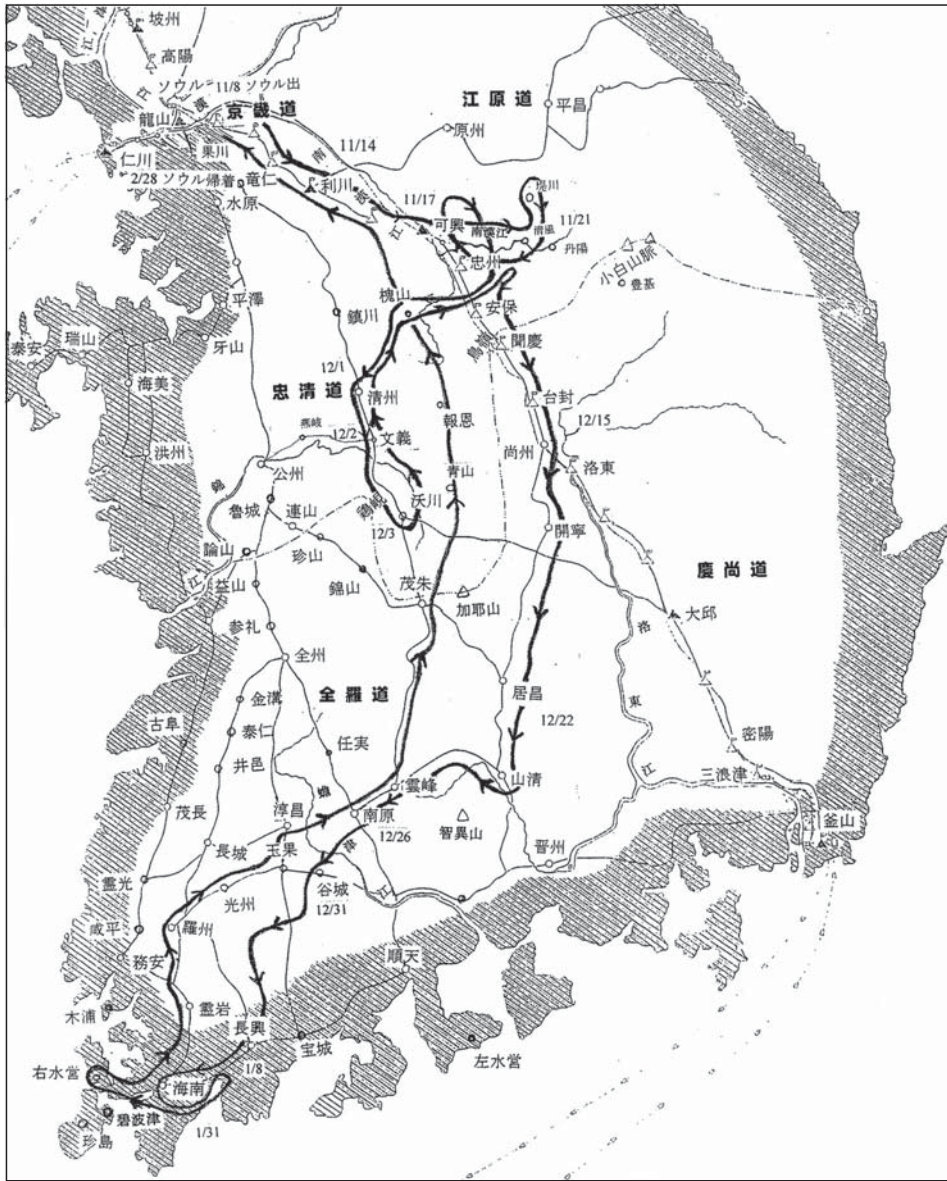
「従軍日誌」筆者の部隊が、ソウルを出軍する部分を紹介する。なお原文のままであるが、原文のカタカナをひらがなに直し、一部、漢字をひらがなに直し、読みがなを加えたところもある。またカッコで筆者の注記を加えた。原注の場合はその旨記した。韓国の研究者との共同調査を踏まえており、各地で市民の方々の協力をうることができた。この報告を検証していただくためにも、最小限の範囲で分かりやすくした。原文は、本誌に掲載の史料紹介を見ていただきたい。

11月11日、(ソウル、^{ヨンサン}龍山)……同夜、命令あり、今般、東学党討伐隊（後備第19大隊）の行進路を三つに別ち、すなわち東路・西路・中路と三道より分進すべし。すなわち第一中隊・松木大尉は、東路兵站線を進み、第二中隊・西森大尉は、西路を進み、第三中隊・石黒大尉は、中路を分進し、各隊共、忠清・全羅にある所の東徒（東学農民軍）を鎮滅し、慶尚道洛東兵站部に出て待命す可し。よりにて、各隊其準備をなし、我が第一中隊は、通弁二名、道案内三名、皆な韓人、通の内壺名は、対州人伊藤長太郎にして、これを連卒し、十二日、前七時三十分、竜山を出発す、このとき第一中隊附桑原少尉は電信護衛兼鉄道^(ママ)側量の守衛として中路線を行進す。

「東学党討伐隊」、後備第19大隊第1中隊は、1894年11月11日夜に命令を受けて、12日朝、ソウル、^{ヨンサン}龍山（日本軍陣営）を出発した。大隊の任務は、東学農民軍「鎮滅」と記されている。各3中隊が3路に分かれ、東路、中路、そして西路を進んだ。「従軍日誌」筆者の第1中隊は、中隊長松木正保大尉に引きいられ、東路をたどった³⁷⁾。なお日誌の筆者兵士は、第1中隊の、第2小隊第2分隊に所属した。

引用文下段に記されるように、第1中隊の桑原少尉の小隊は、「電信護衛兼鉄道測量隊」として、第1中隊が進む東路ではなく、中路を進軍した。「従軍日誌」筆者は、この護衛隊と後に^{チヨンジュ}清州で再会するのであった。第2中隊の「西森大尉」は、森尾大尉が正しい。

「従軍日誌」筆者の配置された第2分隊の人数が、実は日誌のどこにも記されていない。他の二つの分隊について、日誌のなかで、第2小隊第1分隊は15名、同第3分隊は18名と記されている³⁸⁾。第2分隊も、15名から20名程度であったであろう。「従軍日誌」は、この兵士の、分隊またはせいぜい小隊からの兵士の視界において、つまりこの兵士の経験したこと、また見聞したことの範囲で、しかし具体的に戦場を描写しているのである。東路の第1中隊は、ソウルから釜山へ通ずる日本軍兵站線に沿って出軍した。この第2分隊の行軍路を地図1とし



- ・ 矢印を付けた実線が、第2分隊進路の概略
- ・ 陣幕(三角テント)の印、釜山・ソウル間、日本軍兵站線
- ・ 監部、司令部、支部で印を分ける。ただし区分は変動した。
- ・ 『明治二十七八年日清戦史 第八巻』挿図第一「兵站並電信線路図」を参考にした。

地図1 討伐部隊、第2分隊の進路概略図

て図示する。

韓国の研究者申榮祐氏と玄明喆氏と井上も、早朝7時、ソウルの延世大学宿舎から現地調査に出発した。北接東学農民戦争研究の第一人者、申榮祐氏の運転で、玄明喆氏には通訳をして

いただいた。

第1中隊は、出発してから二日後、1月14日に^{コンヂアム}昆池岩を出て、^{イチョン}利川へ入る。利川は、ソウルの東南約60キロにある。ソウルも利川も^{キョンギド}京畿道で、第1中隊は、まだこの京畿道を出ていない。「従軍日誌」の昆池岩から利川へ入る部分を紹介しよう。

同（11月）十四日、午前七時三十分、出発。行路凡弍里の所に小村落あり。この所通過せんとするとき、小兒韓人走り来り、我隊に書翰を呈す。開展するに、その村に東党の組人あるを探り、報告の書面なり。依て急行、その家宅に到り、壺名を捕縛し、姓名^{キムギヨソ}金基龍、尋問するに父は東党の接主にして、過日全羅方面に赴き、各魁と集合せりと答ふ。午後三時、利川兵站部に至る。すなわち^(ママ)捕慮誘道、この所の獄に投す。午後七時三十分、右の金基龍、我歩哨に抵抗せしを以て、獄屋より出し、銃殺す。この日、行程三里、我隊利川に着するや、ここを去る壺里半の所に東党あるを報し来り。依て、第二小隊楠野少尉、選抜隊長にて随行し、右の村落に至り、探索敵にしその邑民を捕え、詢問し、東党多く有りしも、過日全羅道え集合なせしを答ふ。或は又、拾余戸の人家を取巻き、家ごと探索す、奔る者あれば、これを銃殺す。このとき村民等驚き各所に陰伏す、これ又婦人等拾三名、一同奔り来るを其所に手真似を以て、留置き、後に村首に渡す、日没して後、利川に帰宿す。

昆池岩を出て、利川へ向かい、「凡（およそ）弍里」のところの「小村落」。「その村に東党の組員ある」という報告が入る。「その家宅に到り、壺名を捕縛」。姓名は、^{キムギヨソ}金基龍。「尋問する」と、父が東学農民軍の「接主」であるという。父は、「過日全羅方面に赴き、各魁と集合せり」と。

注目すべき金基龍の証言である。朝鮮の中心部である京畿道の利川は、東学農民軍の、いわゆる「北接」の影響下にあったのであり、その指導者が、朝鮮南西部の全羅道、南接東学農民軍の「各魁」、つまり指導者たちのもとへ赴いていた。

昆池岩からおよそ2里。朝鮮の里は日本里の十分の一であり、記載は朝鮮里ではなく、日本里でのものである。昆池岩から8キロの「小村落」である。なお昆池岩から利川まで全体の行路は、上の文中のように「行程三里」12キロである。

申榮祐氏は、車の距離計で8キロを計りつつ進んだ。昆池岩と利川の間を標高300メートルほどの小山脈が横切っており、「^{クアンヒョソ}広峴」という峠——峴は峠である——に上がる。東南向の利川側へ下る坂の小村落で金基龍が捕らえられたのであった。周囲の村、^{ナムジョンリ}南井里は農村集落であった。

金基龍は、第1中隊によって、利川兵站部へ「捕虜」として連行され、午後3時、「獄」に

投げられる。利川市西部、^{ソルボンサン}雪峰山ふもとにある市立博物館を訪ね——利川は朝鮮陶磁器の名産地——、博物館で、昔の利川監獄は、現在の利川市街中央、^{チャンジョンドン}倉前洞事務所あたりであったと教えられた。倉前洞事務所の建物を訪ねると、隣接して利川文化院があり、旧監獄の詳しい位置は、洞事務所の裏側、現在の利川生涯学習センターの場所であると、さらに教示をうけた。利川監獄の、堅固な門を構えた往時の写真も残っていた。

記述のこの部分から、第1中隊は、昆池岩での宿泊と同じように、監獄がある利川市街の中央部に天幕を張ったことが分かる。先ほどの記述を見なおすと、「すなわち捕虜^(ママ)誘道、この所の獄に投ず。午後七時三十分、右の金基龍、我歩哨に抵抗せしを以て、獄屋より出し、銃殺す」とある。投獄された接主の息子、金基龍は、「我（第1中隊）歩哨に抵抗」したとされて、「獄屋より出」され、市街の中央で銃殺された。投獄から4時間半後のことである。

金基龍、銃殺までの経過を見ると、捕虜を警備する歩哨が立つ場所は、むろん獄外であろう。獄に捕らわれた捕虜金基龍は、第1中隊の歩哨に対していかなる「抵抗」ができたのであろうか。「抵抗」があったとして、捕虜の金基龍をなぜ獄から出して銃殺したのか。「従軍日誌」は「捕虜」と記す。もし戦時捕虜と同様の扱いであったとすれば、もちろんであるが、投獄後の獄内での抵抗を理由にする銃殺は、およそ囚人の扱いを逸脱した不法な行為である。

なおこの利川監獄では、前月にも「破獄逃走」を企てたと、投獄されていた10名の東学農民軍が銃殺されていた。「南部兵站監部 陣中日誌」10月28日条に、ソウルの井上馨公使へ次のように報告電報を送ったと記されている³⁹⁾。

利川の獄舎に繋きありし彼徒（東学農民軍）十名は、破獄逃走を企てたるを以て之を銃殺せり

前に見たように、大本営が東学農民「ことごとく殺戮命令」を出したのが10月27日夜であった。その翌日、夜8時50分、仁川兵站監の日本公使館宛電報に「昨夜来の情況」の一つとして利川監獄東学農民軍10名銃殺が報告され、のち大本営にも報告された。この銃殺は、「ことごとく殺戮命令」と符合しすぎていると思う。その4日後、利川兵站守備隊、田中大尉は、電報で、こうした銃殺を行った利川兵站部を「優勢の東学党（北接東学農民軍）」が襲撃しようとしているという電報を、仁川兵站監と兵站線守備隊司令官、^{カフン}可興の福富大尉らに報せて、利川に援軍を送らせていた⁴⁰⁾。

申榮祐氏は、東学農民軍の北接勢力、そして北接のなかでの京畿道東学農民軍の役割、行動などについて論文「北接農民軍の公州^{コンジュ}牛禁時^{ウグムチ}・連山^{ヨンサン}・院坪^{ウオンピョン}・泰仁^{テイ}戦闘」を發表している⁴¹⁾。第2次東学農民戦争の初め、^{チュンチョンド}忠清道（京畿道より東南部で、朝鮮中央の山岳丘陵部）をはじめ、^{カンウォンド}江原道（京畿道より東部、山岳と東海岸部）、^{キョンスンド}慶尚道（朝鮮東南部）、京畿道（ソウルが在る、韓国

の北東部）などから、忠清道報恩の地域に北接東学農民軍が集結して抗日に蜂起、起包する。その北接農民軍に集結した農民軍の半数、約2万名は、全羅道（朝鮮西南部）の南接勢力、全^{チョン}奉^{ボン}準^{ジュン}の起包に参加して、全^{チョル}羅^ラ道^ドへ遠征した——残りの半数、同人数の約2万名は、残留して忠清道報恩周囲の韓国中央部山岳地域東学農民軍の守備隊になった——。南西部の全羅道方面へ遠征した北接東学農民軍は、東学農民戦争のなかの最大の激戦、もっとも知られている公州（忠清道）戦争を戦い、しかも公州戦争の重要な戦闘、大橋戦闘などで奮戦していたという新しい史実が見出された。申榮祐氏によれば、公州戦争へ参加した北接遠征軍の中心になったのは、これまで注目を集めてこなかった京畿道東学農民軍で、なかでも外でもない、上に見た利川や安城^{アンソン}などの東学農民軍であった。北接東学農民軍の一人として、大橋戦闘、有名な牛禁峙戦闘や連山戦争など自身北接遠征軍に参加して戦った人物の回想録『均庵丈^{キョナムザン} 林東豪氏^{イムドンホ}略歴』を掘りおこして、他の史料で事実を裏付けなおしながら、これまで全奉準らに指揮された主力である全羅道の南接東学農民軍にくらべて抗日蜂起にきわめて消極的と評されてきた北接東学農民軍を積極的に評価し直して、北接東学農民軍像を大きく変えた研究であった。

現地で我々が歩いた、峠「広峴」の下、南井里あたりの、小村落の金基龍の父、東学農民軍接主は、「過日全羅方面に赴き、各魁（指導者）と集合せり」という。この日本側の「従軍日誌」筆者の記載は、申榮祐氏の新しい研究を、まったく別の日本側史料から見事に裏付けており、貴重なのである。

第1次公州戦争は、11月23日から始まる⁴²⁾。公州戦争の前哨戦、細城山^{セソクサン}戦闘や大橋戦闘は、同月21日から戦われた。その7日前、11月14日、公州へ遠征した利川——広峴付近の村に住むと推測される——東学農民軍指導者の息子が逮捕され、銃殺されていたのであった。

その次の記事を見よう。第1中隊に、利川を「去る（離れる）1里半の所」に「東党ある」という報告が届く。第1中隊の第2小隊が、「右の村落」に赴いた。第2小隊は「従軍日誌」筆者自身の小隊であり——小隊は80人前後——、「従軍日誌」筆者も、小隊長に「随行し、右の村落に至」る。兵士は、討伐現場に参戦したのである。「探索を厳にし」、きびしく探索し、村人を捕らえて尋問した。村人は「東党多く有りしも、過日全羅道へ集合なせしを答ふ」。

この村落は、「東党多く有り」と記されるように、東学農民軍が優勢な村である。多くいた東学農民たちは、銃殺された金基龍、その父親と同じように、抗日蜂起を宣言（起包という）し、蜂起の準備中だった全奉準らの南接全羅道農民軍へ、集落ぐるみで「集合」、遠征したのである。この利川の農民たちもやはり、公州戦争に参戦したと思われる。こうして、この小村落の主要な東学農民は、すでに村落には不在であった。第1中隊は、その農民軍の中心人物たちが不在になった村落を襲い、「或は又」、10余戸の人家を「取り巻き」、包囲し、家ごとに探索し、「奔る者あれば、これを銃殺す」。「或は又」という接続詞は、第2小隊の討伐が、その他、様々に行われたことを示唆している。

「拾余戸の人家を取巻き、家ごとに探索す、奔る者あれば、これを銃殺す」。つづけて「このとき村民等驚き各所に陰伏す」。この村民の、驚き隠れる動静を記した文言は、討伐隊大隊長や司令部の記録にはけっして登場しないのであって、徴兵された農民兵士だから記された文言と思われる。日本兵が取り巻いての探索に、「奔る者あれば、これを銃殺す」は、村落のなかで東学農民軍の「多くある」集落であったとしても、「奔る者」は、抵抗していない「逃走者」の村民なのであり、その銃殺は、苛酷、そして不法と言うべきであろう。銃殺した人数は触れられていない。このような日本軍の討伐作戦を、接主の子息、投獄、銃殺とあわせて、すくなくとも次のように言えると思う。大本営の東学農民「ことごとく殺戮命令」や、訓令第1条の「探究し之を剿滅」が、厳密に字句通りに実施されたのではないが、大本営から出された殺戮命令が生きていたからこそ実施された、苛酷で不法な討伐作戦であった、と。

利川を去る1里半、距離6キロである。東学農民が多く居て、村人たちが全羅道農民軍に遠征したという村は、どこの村であろうか。利川は、標高200メートルから300メートルほどの山が取り囲んでいる都市である。北部では、^{ウォンジョクサン}圓寂山(559m)などの南側のふもとの村であり、南部であれば、山に挟まれた谷間の^{アンピョンリ}安坪里など、それらのどれか、おそらく地図上6キロから4キロの同心円のなかに入る村であろう。今後の課題である。韓国京畿道の利川地域史研究者の助力を求めたい。

獄から出されて銃殺された金基龍の家があったのは、広岷下周辺の「小村」であった。第2次東学農民戦争(日清戦争)終了の翌年、1896年、知られているように^{ウイビョン}義兵闘争(前期義兵運動)が起こる。利川では、この広岷においてまず義兵が蜂起した。実は、利川地域は、日清戦争直後に激しく展開する京畿道義兵運動の大きな中心で、京畿道の北は^{ボチョン}抱川、西は^{アンサン}安山、南は^{アンソン}安城、^{チュクサン}竹山、東は^{ヨジュ}驪州など道内の広範囲におよぶ各地から一千名余の義兵が「^{イチョンシニョチン}利川首倡義所」に集合して大蜂起をしたのである。京畿道各地から利川へ入って参加した指導部の中心には、義兵の主導者として知られている儒生だけではなく、前職、現職の官吏も参戦していた。義兵には、朝鮮政府の兵士も参加した。1897年1月18日、100余名の日本兵を、岾の下谷間や山間、山上から、伏兵で連携して襲撃する戦法を用いて撃破、西の廣州まで追撃した。その岾こそ、前々年11月中旬に銃殺された金基龍がいた広岷であった。伏兵の戦法が用いられ、強力な日本軍に戦果をあげたのは、広岷地域村民の支持があったことを示している。広岷戦闘は、朝鮮全域における前期義兵運動の最初の本格的な戦争であった。「京畿道義兵戦争と利川」のパネルや、その後日本軍に壊滅させられた利川市全域の写真が市立博物館で大きく展示されている⁴³⁾。この時、利川の陶磁器生産地も日本軍の討伐によって壊滅させられたのである。解放後、再興された陶磁器窯は、利川市街から見てきた広岷の岾へかけて、道沿いにとくに多く造営された。朝鮮の青磁、白磁、陶磁器名産地として知られ、現在の日本の観光案内書でも広く紹介されている利川市がこのような日本との激動の歴史を持っていることは、日本で知られ

ていない⁴⁴⁾。金基龍の父親は、今のところ姓名も不明なのだが、利川文化院刊行の『利川の義兵抗戦と独立運動』は、第2次東学農民戦争に指導者として参加した利川の人物に、同姓である^{キムギョソク}金奎錫、^{キムチャンジン}金昌鎮などを載せている。二人は、農民軍を率いて、北接東学農民軍に「参与」したという記録はあるが、人物の来歴は不明だという（同書、「利川の義兵と独立運動家」⁴⁵⁾）。

金基龍は、「東学党討伐隊」後備第19大隊によって最初に捕縛された人であり、その父親である全羅道へ赴いた接主の姓名は不明である。利川市近郊の、日本軍小隊の東学村落襲撃・搜索銃殺事件は、11月14日、日本軍のソウル出軍の、はやくも3日目、東学党討伐大隊によって襲撃された最初の村で起きた。多くの村民が、東学農民軍に加わり、さらにはるかに全羅道へ遠征して公州戦争で闘った村であった。村名は、今は不明である。

2) 可興・東幕里（「同幕邑」）の現地調査

「従軍日誌」の記載から、第1中隊の忠清道「^{トンマクブ}同幕邑襲撃」の部分を紹介する。利川の事件からさらに3日後、1894年11月17日の記事である。

同十七日、可興の北方三里去る所に東党あるを探り、同日午前三時出発し、暗夜に乘し、川を渡り、同幕邑に向ふ。時に寒風強く、身を貫撤し、六時同幕邑に至る。小敵に出会し、放火を始め、少時にして撃退し、村家を焚き打ちにす。敵死者拾有八名、分捕品は、弓、鎗、刀、火薬、米穀、木棉類にして、午後三時十五分、この村に接首、^{イギョウウォン}李敬原居れり、すなわち銃殺す。この日、初めての戦争にして、仁川上陸以来、敵応の手初、各兵士、勇に進んで、可興に帰る。往復六里、道路甚た悪く、車輛は通ぜざる小路なり、可興北方の川は、漢江の上流なり。

忠清道^{カフン}可興は、ソウルへと南東方向から流れてきた^{ナムハンガン}南漢江が西方へ向きを変える、屈曲点のやや手前南岸（左岸）にある農村である。可興は、現在、忠州市に入っており、現在の地図2を掲げた。可興南岸に日本軍兵站部が置かれていた。釜山からソウルに至る日本軍兵站線北半部の守備隊司令部であった。

「従軍日誌」によれば、討伐隊第1中隊は、「同幕邑」を襲撃して東学農民軍と戦った。「同幕邑」について見ておこう。掲げた現在の地図でみれば、可興里から南漢江を北岸へ渡り、「従軍日誌」筆者部隊のように、さらに北行すると、^{トンマンニ}「東幕里」がある。1910年代に刊行された旧総督府作成五万分の一地図「可興」にも同じ場所に^{トンマクドン}東幕洞が記されている。一方同幕は、いずれの地図にもない。「従軍日誌」の「同幕」はハングルの同音異字（トンマク）で、「東幕」が正しい。当時、日本軍の地名同音異字の記載は日常であった。

東幕里は、可興（日本軍兵站部）から直線距離で北へ5キロ弱である。「従軍日誌」は、可興



・韓国国土地理情報院, 2014年修正, 五万分一地形図「サムチョン嚴政」より

地図2 可興兵站司令部跡と東幕里

の「北方, 三里去る所」, 12キロ離れた所と記述しており, 東幕里は近すぎる。しかし, 現在も南漢江を渡る橋は, 可興の上流, 牧溪大橋モクケテギョまで存在しない。当時は, この橋もなかった。下流は, 今もはるか遠くまで橋がない。上流, 下流には, 数ヶ所の「渡し場」(ナル)がある。

第1中隊は、南漢江を渡し場まで迂回して、どこかで渡河——当時の日本軍記録では、この付近は歩行渡渉は無理であった⁴⁶⁾——したはずである。渡った後も、山（牧溪渡し場であれば、チェネピョン峰など）を迂回してさらに進軍である。小路で悪路だったと記されている。歩行距離は、地図上の直線距離よりはるかに長かったと推測される。やはり、現在の東幕里なのである。

訪ねると、村の中央部を国道19号線の高架が通っており、南漢江へ北から流れ込む九龍川^{クヨンチョン}の、さらに東支流の谷間奥の純農村地域であった。リンゴ園が多く広がっていた。可興の真北で、背後奥には標高400メートル前後の山々が連なる。東学農民軍が、密かに、そして大規模に集結するのに適した村であった。

「北方三里去る所に東党あるを探り、同日午前三時出発し、暗夜に乘し」。この記事も注目される。

可興を含む日本軍の兵站線守備は、すでに9月以来、後備第10聯隊第1大隊が当たっていた。この大隊の「後備歩兵第十聯隊 陣中日誌」12月13日記事には、後備第10聯隊第1大隊の「各兵站地（兵員）配布」一覧が掲げられている⁴⁷⁾。可興兵站部には、同聯隊第1大隊の第1中隊が配置され、福富孝元大尉が兵站司令官に任じ、小白山脈^{ソベクサンメク}一帯と北側（山脈北側が京畿道と忠清道、一方、南側が慶尚道）における日本軍守備隊第1中隊の本部司令部になっていた。可興司令部には、士官1名、下士2名、兵卒34名が配置されていた。この他、通例ほぼ同人数の日本人軍夫や韓国軍兵士もいた。忠清道にある日本軍の兵站部では、最大の兵員が常置され、前述のようにスナイドル銃で制圧していたのである。それでも、11月17日、後備第19大隊第1中隊は、午前3時、夜明け前に、可興を出発、「暗夜に乘し、川（南漢江）を渡り、同幕村に向かう」のであった。11月中旬で、朝鮮の真冬が目前であった。「従軍日誌」では、同月10日にソウルで結氷を見ていた。深夜の渡河で、兵士は「時に寒風強く、身を貫徹し」と記す。暗夜を選ばなければならなかった。このように、日本軍守備隊は、南漢江上流、小白山脈山岳地帯の守備隊本部司令部の付近でも、東学農民軍に対して軍事的優勢を、全然、確立できていなかった、点を抑えていただけであった。

「従軍日誌」は、東幕里進撃に、小隊とか分隊とかを記していない。小隊や分隊が進撃した場合は、必ず厳密に隊の区別を記しているのである。中隊200余名で進撃したのである。夜明け前、暗夜に乘じて川を渡るにも、午前3時を選んだのは、中隊規模の作戦に照応している。船を使った南漢江渡河には時間を要したであろう。

第1中隊は、東幕里で「小敵」（東学農民軍）と出会い、「放火」射撃し、「少時にて撃退し」た。少時と記されるが、日本軍が中隊規模で応戦した戦闘であった。農民軍死者18名であり、同時期のゲリラ戦としては激戦である。拙著『明治日本の植民地支配』で指摘したように、東学農民軍の抗日戦は、強力な敵の来襲には、後退を、敵が引けば、進むを原則としたのであ

る⁴⁸⁾。

こうして「村家を焼き打ち」した。分捕品は、弓、鎗、刀、火薬、米穀、木棉類で、接主、^{イギョンウォン}李敬原を銃殺した。この分捕品は、武器と軍需品、食料であり、東学農民軍は、抗日のためにここに集結していたのである。

この約 20 日ほど前、北接東学農民軍は、この地域で一斉蜂起していたのだった。10 月 26 日、可興では、東学農民軍「東学党約二万人許」が牧溪東部、可興の東南 2 キロの^{ネチヤン}内倉に集結し、「正に可興（日本軍兵站部）を襲はん」とした。可興・忠州・^{アンボ}安保における東学農民軍の日本軍への一斉攻撃の一つであり、牧溪東岸まで進出した「約七八百名許」の東学農民軍の先陣と日本軍と、可興戦闘が行われた。対岸で「一人首領の如きもの青旗を振り叫号して令を伝ふるものの如し」⁴⁹⁾。銃撃戦で撃退したが、日本兵憲兵上等兵一人が戦死——今、可興兵站部跡の丘斜面に、当時日本軍が自然石に刻んだ、戦死兵士追悼碑文があり、表面は削られて碑文は消えている——⁵⁰⁾。これらの一斉蜂起や戦闘は、日本軍広島大本営が後備第 19 大隊を日本から派遣する作戦をたてる要因になったのであった⁵¹⁾。

そうして今回、およそ 20 日後、後備第 19 大隊第 1 中隊兵士の、この「従軍日誌」に記されたように、11 月 17 日、可興兵站司令部から北方数キロ離れた所で、南漢江の対岸にある忠清道山岳の奥に、北接東学農民軍がふたたび集結していたのである。

この東幕里戦争は公州戦争前哨戦（11 月 21 日から）の 4 日前である。これまで、後備第 19 大隊の緒戦は、先に指摘したように、11 月 21 日頃、西路分進隊の公州戦争前哨戦とされてきた。しかし、第 1 中隊・東路分進軍の 11 月 17 日、中隊を動員した東幕里戦争が後備第 19 大隊の、東学農民軍との射撃戦の緒戦であった。

つづいて、「午後三時十五分、この村に接首、^{イギョンウォン}李敬原居れり、すなわち銃殺す」。村に接主、李敬原が居るのを見だし、「すなわち銃殺す」。「すなわち」は「即座」の意であり、その場でただちに日本兵が殺戮した。「すなわち」という言葉は、討伐の様相を再現するために忘れてはならない文言である。

記されている「午後三時十五分」は、どういう時間なのか。接主、指導者を見だし、銃殺の時間であろうか。作戦終息時間も記されていない。確実なことは、この時間、午後 3 時 15 分まで、第 1 中隊が討伐をつづけていたことである。

第 1 中隊は、早朝 6 時に東幕里に着いていた。第 1 中隊 200 余名による東幕里討伐は、実に 9 時間余におよんでいた。東幕里は、現在、訪ねると純農村で、地図のように、南東部の^{インガン}論江里村落との分岐点の^{セマル}新邑から約 2 キロ、水田と畑、リンゴ園の小集落が広く散在して北奥の集落へ長くつづいている。1915 年測量地形図でも四つほどの集落がある。標高約 150 メートルの最奥のまとまった小集落もやはり存在しており、今と同じ^{サムヤン}三陽という集落と記されている。「村家を焚き打ちにす」という文意は、「従軍日誌」に記録された他の「焼き打ち」事例を見て

も、北方へ延びる小集落ごとに、最奥の村まで武器、軍需品、食料を探索し、村の家々すべてを焼き打ちした可能性が高い。そうして、薄暮が迫る午後3時過ぎ、接主、李敬原を見いだした。

分捕品の弓、鎗、刀、火薬、米穀、木棉類は、すべて武器と軍需品である。数量は、記されていない。「村家を焼き打ち」した討伐が、9時間余に及んだところをみると、相当量で、農民軍の集結も、大規模であったと推測される。地の利を得て、日本兵が来ることを知っていたはずであり、日本軍中隊の眼前に現れた東学農民軍は、「小敵」、少数であったであろう。しかし、すでに20日ほど前に牧溪の戦いで「恐るべき小銃」であるスナイドル銃の威力を体験しながら中隊規模の戦力に退却せず、18名の戦死者を出して反撃する東学農民軍が居た。

東幕里では、接主（「接首」）李敬原（同音異字の可能性ある）を「すなわち銃殺す」。利川の金基龍の父といい、東幕里の李敬原といい、この後の城内里ソンネリの事例も、日本軍第1中隊が東学農民軍の地域指導者である接主の搜索と殺戮にねらいをつけていたことが明らかなのである⁵²⁾。

現在の忠州市蘇台ソデミョン面 東幕里に北接東学農民軍が集結しており、日本軍討伐大隊の第1中隊200余名が、これを襲撃し、反撃に出た東学農民軍と射撃戦が戦われ、東幕里の「村家を焼き打ち」、弓、鎗、刀、火薬などの武器と、米穀、木棉などの物資を分捕り、捕らえた指導者をただちに銃殺した。討伐は、家々の焼き打ちをしつつ、少なくとも9時間以上つづいた。

3) 清風縣、城内里（城内洞）の現地調査

「従軍日誌」の記載から、第1中隊の忠清道チョンブン清風ソンネドンの「城内洞進入」の部分を紹介する。

同二十一日、午前七時、忠州出発。途中二里余、至る所の村落に東党の接首あるを聞き、その家屋に到りし所、逃走不在に付、家屋焼失す。また更に前進して四里を過ぐる所に村落あり、城内洞と云ふ、民家悉皆焼失せり。これ前に後備第十聯隊、東学此所に集合せしを撃退の際、焼きし者とぞ、我隊至るや、村民又恐怖し逃走す。午後五時清風に着泊、行程八里。

「一村落あり。城内洞と云ふ。民家悉皆焼失せり」と「城内洞」が記される。忠州郷土博物館チュンジュ研究員に、城内洞はダム湖に水没したが、一部が現在も存続していることを教えられた。ダム湖脇にある城内里ソンネリ（錦城面クムソンミョン）である、と。忠州から、巨大なダム湖、清風湖北岸チョンブムホを大きく迂回する国道38号線を、申榮祐氏の運転で城内里へ向かった。

第1中隊は、小白山脈北側のふもとにある忠州まで南下し、忠州から道を東方へ転じて、山脈の北側山裾にそってさらに東方へ、清風の方向へ進軍した（地図1）。上の「従軍日誌」に、出発して「途中二里余、至る所の村落に東党の接首（接主）あるを聞き」と記されている。そ

うした接主の家屋へ着くと、接主は「逃走不在」。第1中隊は、接主の家屋を次々に焼き払った。小白山脈北側の地域一帯で、東へ進軍した日本軍の、東学農民軍接主を徹底的に探索する討伐が記されている。

これより一ヶ月余り前、洛東など各地の兵站司令官が、仁川兵站監に、「豊基、丹陽、報恩郡地方は、なお該党（東学農民軍）の巢窟」と報告していた⁵³⁾。豊基は小白山（1439 m）の南側ふもとにある。小白山脈を北へ越えて、北西に丹陽、西に清風、そして忠州を越えて南西に報恩がある。これは、東から順に豊基・丹陽・清風・忠州・槐山・報恩と小白山脈に沿って120キロに及ぶ半円形を描く広大な山岳地帯である。小白山脈も同じように小白山、月丘山、俗離山と標高1000メートルを越えてそびえており、この山脈に沿う深い山岳地帯が、北接東学農民軍の「巢窟」（隠れ家）、根拠地であった。第1中隊が、11月21日から進撃したのは、その東部方面であった（地図1）。

清風湖東北の脇にある「城内洞」、現在の城内里に着いた。城内里は、巨大なダム湖が北東部隅へ入江状に入り込んだ東岸にあった。現在は、ダム湖の東斜面に地方道82号線が南北に通っており、その上下に、今も、往時の城内里の痕跡に等しい小集落が残っていた。ダム湖は、現在の地形図では忠州湖と記される。現在の五万分一地形図「九龍」は、標高100メートルを湖水面として作図しており、往時の城内里の集落は水没して地形図では消えている。水没前の城内里と周囲の様子は、旧総督府時代、1915年測量の五万分の一地形図「堤川」に記されている。景況を復元する資料にするために用い、「堤川」の一部を地図3として掲げた⁵⁴⁾。

現在、湖底にすべて沈んだが、南漢江の南岸（左岸）に、交通の要所、清風の街があった。対岸が北津里で、支流高橋川が北から北津里へ流れこむ。河口部に東から北津里の山が突きだし、西側も標高500メートルを越す大徳山で、支流河口部は、幅約500mと狭かった。河口の1キロ北奥、支流東側に、地図のように、東西2キロ弱、南北1キロの平野が隠れていた。この平野が城内里で、1915年測図によれば、水田が東西の平野部と南北支流沿いにも広がっている。支流高橋川は、平野の西端を流れていた。村落は、城内里北部と西側南北の道路に沿って広がっていた。城内里の東奥は、地形図のように、800mを越す急峻な山岳で、我々は実見できなかったが、溪谷奥に霧岩寺という古寺が現在もある。

「従軍日誌」をふたたび見ると、「(城内里の集落は) 民家悉皆焼失せり。これ前に後備第十聯隊、東学此所に集合せしを撃退の際、焼きし者とぞ、我隊至るや、村民又恐怖し逃走す」と記される。

城内里の集落は、第1中隊が着くと、民家すべて焼失しており、村民は「恐怖し」て逃げた。以前に、後備第10聯隊が集合した東学農民軍を撃退し、村を焼き払った、という伝聞が記されている。注目される記載である。

後備第10聯隊第1大隊は、大隊本部司令部が釜山にあり、先にも述べたように、釜山から



五万分の一地形図「堤川」
朝鮮総督府陸地測量部 1915年製版より
…は、淸風湖案内所。本文参照。

地図3 淸風と城内里

ソウルまで北上する日本軍兵站線の守備部隊であった。小白山脈鳥嶺^{チヨリョン}の峙山下の閔慶兵站部^{ムンギョン}と同時の北側，ソウルまでつづく忠清道，京畿道の各兵站線は，後備第10聯隊第1大隊に属する第1中隊が守備隊になっていた。第1中隊の本部は可興にあり，これも先述したように，司令官は福富孝元大尉であった。

一方，朝鮮中南部全域の日本軍守備隊を率いる総司令部は，西海岸にある仁川の南部兵站監部であった。南部兵站監部が記した「陣中日誌」が，現在，東京の防衛省防衛研究所図書館に保存されており，日誌の1894年10月16日に次のような記事がある⁵⁵⁾。

九，午後十時二十五分，可興福富大尉より，左の電報あり

一昨日，忠州支部より，下士二名，兵卒二名を出し，タンゲツに於て東学党の首領リンシヤクゲン以下三名を捕獲したり，又昨日同支部より，下士以下九名，軍夫七名，韓人七名を以て淸風付近城内の東学党巢窟を襲ひ，同地の首領セイトカンを斃し，四名を捕獲し，

賊の即死約三十名、彼か所持せし小銃二千挺、其他、火薬等、残らず焼捨てたり、但し上等兵一名、為めに負傷す、委細郵便（下線は、原文）

電報の着電記録である。番号「九」は、日誌同日記事の9番目を指し、発信者は可興兵站部福富大尉、受信者は南部兵站監部であった。注目されるのは、「九」の文中2行目、「又……」以下の記事である。昨日、後備第10聯隊の同支部（忠州支部）から、下士官以下兵士9名、軍夫7名、韓人7名、計23名で、「清風付近城内の東学党巢窟を襲」った。後備第10聯隊の部隊は、同地の首領（接主）セイトカンを殺害し、4名を捕らえた。東学農民軍の戦死者は、約30名、農民軍の小銃2千挺、火薬などを、残らず焼き捨てた、という。この清風付近の「城内」が問題である。

福富大尉からの電報報告は、翌日17日夜、南部兵站監部から広島の本営へ打電された⁵⁶⁾。その電文の一部は、「また十五日夜、清風付近の東学党を攻撃し、首領を倒し、四名を捕へ、賊の即死約三十名……」と報じた。この時、電文から、記されるように「城内」と「巢窟」の二つの文言が消され、「十五日夜」の「夜」文言が加わった。

その後、この「清風付近」の討伐は、19日、南部兵站監部から日本公使館へも報じられ（「南部兵站監部陣中日誌」⁵⁷⁾、同じ19日、日本公使館から東京の陸奥外務大臣に打電され（「韓国東学党蜂起一件」電受第521）⁵⁸⁾、20日、東京陸奥外務大臣は、これを本営の伊藤博文総理と西郷従道海軍大臣に報せるように、あらためて本営へ打電した（「同」電送第416）⁵⁹⁾。南部兵站監部発信以降のこれらいずれの電文も、17日の広島本営宛「十五日夜、清風付近の東学党を攻撃し」と、助詞の変化を除けば同文で、「城内」文言がない。

戦時における「陣中日誌」の記し方には、参謀本部が制定した「例式」があり、「時（月日時一原注）と処（地名位置一原注）とを明記せざるべからず」（第七項）と厳密に決められていた⁶⁰⁾。福富大尉の発信電報のように、「清風付近城内の東学党巢窟」の城内は、清風の北側近く、まさに「付近」に城内里があることを知っていれば、その「城内里」であることが明確に分かる。つまり「城内」は日誌に記さなければならない地名なのである。そして、しかし清風を離れた仁川の南部兵站監部で「城内」と「巢窟」が省かれたのである。現場を知らない南部兵站監部によって、朝鮮各地に無数にあった城——日本支配時代に破壊された——の内という、地名ではなく「巢窟」のような普通名詞の余計な文言と判断されたのであろう。一方、南部兵站監部発信電報以降、付け加えられた「夜」は真偽を留保する。なお福富大尉電報には「委細郵便」とあるが、防衛研究所図書館史料に郵便は見出していない。

発信元である「南部兵站監部 陣中日誌」によれば、「昨日同支部（可興支部）ヨリ……清風付近城内ノ東学党巢窟ヲ襲ヒ」と「昨日」と、10月16日の記事中にも記されている。可興兵站司令部兵の城内里襲撃は、10月15日のことである。襲撃で、東学農民軍4名を捕虜に、約

30名を射殺した。農民軍討伐戦としては、大規模な戦闘があったのである。討伐で、「彼が所持せし小銃二千挺、其他、火薬等、残らず焼捨てたり」、という記事が注目される。小銃二千挺、その他は、弓、鎗、刀など武器類である。火薬なども、残らず焼き捨てた。東学農民軍が、城内里に集めた武器の大量なのに驚かされるが、これを日本兵は、残らず探索して焼き捨て、農民軍30名を射殺したのである。

このような「陣中日誌」に記された討伐、射殺と焼き捨てのあった事実は、後備第19大隊第1中隊兵士が「城内洞と云ふ、民家悉皆焼失せり。これ前に後備第十聯隊、東学此所に集合せしを撃退の際、焼きし者とぞ」と目撃し、「従軍日誌」に記した「民家皆焼失」や「撃退」とみごとに照応する。このように見れば、忠州兵站部守備兵が、10月15日、清風北岸奥の、城内里の集落、平野北側東部に東西1キロ余広がっていた民家のすべてを搜索して、武器を残らず焼き捨て、銃殺をしたことが、史実であることは、確かと言うべきである。すべてを搜索し、武器を残らず焼き捨てる際に、「従軍日誌」筆者が目撃したように、城内里の民家すべても、「悉皆」焼き払われたと思われる。農民軍の即死者約30名は、前述の可興の近く、東幕邑の倍に近い。

「陣中日誌」の福富大尉電報は、報告のなかで、「同地の首領セイトカンを斃し」、と述べていた。「韓国東学党蜂起一件」（日清戦争後、日本外務省が編纂した東学農民戦争時の資料集）の記事に、9月に、可興福富大尉が、韓国政府の宣撫使鄭敬源ソンム、サチョンギョンウォンから入手した「執行望」（東学農民軍の首領）一覧名簿に、「成斗漢ソンドウハン」が丹陽の首領として記載されている⁶¹。丹陽は、清風の東15キロにある堤川地域の中心となる村であり、この丹陽の接主「成斗漢」こそ、10月15日可興兵站司令部兵によって城内里で殺害されたと報告された「セイトカン」である。「成斗漢」は漢字音読みで、「セイトカン」である。

しかし、この時、10月中旬、日本軍が城内里で倒した「首領」は、成斗漢とは別の指導者であった。「南部兵站監部陣中日誌」12月11日の条で、後備第19大隊第1中隊長は、堤川チエチオン方面で、丹陽の指導者「セイトウカン」が、なお「随従の者数十名」と行動をとめている、と報告しているのである⁶²。実は、丹陽の成斗漢は、全琿準ソンファジュン、孫化中サエギョンソン、崔景善キムドンミョンという最高指導者とともに、翌年、1895年3月18日に斬刑に処せられる。『東京朝日新聞』は、成斗漢らを「五巨魁」と報ずる⁶³。日本軍が城内里で倒したのは、別人だったが、日本軍が、丹陽の接主で北接の最有力の指導者、成斗漢を探索していたことが分かる。

1894年10月中旬、南漢江の北岸奥の城内里という村落に東学農民軍の大きな根拠地が造られており、日本軍忠州兵站部守備隊は、この農民軍根拠地村落を襲撃し、村落のすべての民家をことごとく焼き払い、農民軍約30名を射殺する討伐を、第2次東学農民戦争の早い時期に実行していた。また日本軍は、丹陽東学農民軍の、北接東学農民軍の最有力の指導者を倒したと誤認していた。前述の東幕里でも、この城内里でも、東学農民軍の接主が殺害されている。

有名な成斗漢とは別人であったが、この指導者も、城内里に踏みとどまって、逃走しないで戦ったのであろう。現在、清風湖周囲は、申榮祐氏によれば「韓国のアルプス」とも呼ばれ、壮麗な山岳が連なっている。感動的な眺望をもて広がる韓国の一大リゾート地である。城内里の溪奥に潜む霧岩寺も、今、その一部である清風山岳体験遊歩路の名所のひとつである。この地で東学農民軍と日本軍の大規模な戦闘があり、村落まるごとの、民家すべてを焼失させた焼き打ちがあったことは歴史の闇に埋もれていた。

日本軍の城内里討伐の9日後、10月24日、日本軍洛東兵站部は、東学農民軍約4000名が丹陽へと蜂起し、丹陽府を占領したと報告している⁶⁴。これは、同月25日から北接東学農民軍が一斉蜂起し、安保・忠州・可興などへの襲撃をはじめた前哨戦であった。

Ⅱ 文義・沃川戦争 —— 大清湖に沈んだ戦場の復元 ——

1) 日本軍討滅大隊、軍資金の搬送

「従軍日誌」、1894年11月28日の記述は、次のようである。

同（11月）二十八日、（前日午後2時、可興到着、宿泊）、同天気悪く、我が二分隊は、金櫃護衛として忠清道公州にある我大隊本部第三中隊所在まで送付す可き命令に付、即ち金員三千円を受取、韓人夫及駄馬に付し、合計員数二十六箇となし、是韓錢に依てこの数に登る、これを督し、又忠州方向に進む。……我二分隊は、午後三時、忠州に着泊。

討伐大隊東路隊、第1中隊第2小隊第2分隊は、清風^{チョンブム}方面から討伐作戦（東学農民軍を挟撃する作戦）の都合で可興^{カフン}へ戻った。前に見たように可興には、日本軍兵站線守備隊の兵站司令部があった。可興において、「従軍日誌」筆者の兵士がいる第2小隊第2分隊は、「金櫃護衛」の任務をあたえられた。そのため12月11日まで10日間、第2分隊は、ふたたび東方へ展開していった東路隊第1中隊と別行動をとる。軍用金を入れた箱 —— 櫃^{ひつ}は箱 —— の運搬護衛であった。西方面を進軍する後備第19大隊本部隊へ、軍用金を届ける任務である。

軍用金は3千円。現在の貨幣に換算すると、1894年当時の平均米価は、一石（150キログラム）8.83円であり（『岩波日本史事典』『米価の変遷』表⁶⁵）、現在の日本の米価は10キロ、平均3700円程度。3千円は、現在の1900万円程度である。

すべて「韓錢」に両替にした軍用金を、26個の荷物に分けて、朝鮮人人夫と馬に付けて、大隊長の大隊本部隊へと西方へ向かった。韓錢の軍用金26箱を29人の韓人が背負って運んだと記されている。

一方、軍用金を届ける相手の後備第19大隊長は、中路隊第3中隊とともに南下していた。

大隊長は、南小四郎少佐。山口県瀬戸内の農村部、吉敷郡鑄銭司村の出身であった。第3中隊、中隊長は、石黒光正大尉。大尉は、高知県高知市出身。一昨年11月、石黒光正大尉の墓石を、高知大学小幡尚氏の案内をうけて、高知市内の高知城西近くの丘（平和町、小高坂山）中腹で確認した⁶⁶⁾。

南少佐は、大隊長で後備第19大隊の大隊本部隊を率いていた。大隊本部は、第3中隊に同行して、ともに中路を進軍した。「従軍日誌」筆者は、この合同隊を、いつも厳密に「大隊本部第3中隊」と記している。この厳密さは、後に述べる検証にとって重要であった。

大隊本部第3中隊は、中路を、清州^{チョンジュ}を通して、さらに文義^{ムニ}、沃川^{オクチョン}へと南下中であった。一方、軍資金を運送する「従軍日誌」筆者の第1中隊の本隊は、大隊本部第3中隊の東側、日本軍兵站路——日本軍はこの街道を平常、中路兵站線と呼んだのだが、この後備第19大隊の3路東学農民軍討伐作戦においてはとくに東路と呼んだ——を進軍中であった。

軍資金運搬隊第2小隊第2分隊は、忠州^{チュンジュ}を11月28日に出て西に向かい、陰城^{ウムソン}、清安^{チョンアン}を経て、12月1日、清州へ入る。清州は、忠清道の道庁であり、行政の中心地である。翌2日、文義まで南下、12月3日に沃川で大隊本部にであった。

後備第19大隊3中隊それぞれの実際の進軍路が、「東学党征討策戦宿泊表」（『駐韓公使館記録 6』⁶⁷⁾に残されている。大隊本部第3中隊は、たしかに12月1日から同月5日まで、沃川に宿泊していた。

「従軍日誌」筆者の東路隊第2小隊第2分隊は、沃川宿泊3日目の大隊本部に、軍資金を届けた。この時、運搬された軍資金3000円は、後備第19大隊の軍資金の一部であった。『駐韓公使館記録 3』に「南少佐韓銭送金の件」があり、12月5日、仁川兵站監部が井上馨公使に打電した次のような電報がある⁶⁸⁾。

南少佐よりの請求金、三万円（内一六五〇円韓銭）は、十一月二十七日発送せり。この護送者は、今日、安堡^(안포)付近に達せし筈なるを以て、右護送者へ電報を以て、沿道に於て成し得る限り、韓銭交換のことを命し置けり

この軍資金3万円は、仁川を11月27日に発送され、12月5日ころは、鳥嶺峠手前の安堡



・碑文第二面（裏面）一行目
「継文義，周安，至沃川途而與賊遇戦而走之」
写真2 高知市小高坂山の石黒中隊長墓碑

に達したはずだ、と述べられているから、上の東路隊第1中隊第2小隊第2分隊が運んだ軍資金3千円より後の、別便の軍資金である。3万円という額は、現在の日本円に米価比で換算すると、1億9千万円以上である。しかもこの前にも軍資金が送られており、その後も送られたと考えられる。東学農民軍討伐大隊、後備第19大隊が必要とした軍資金は、巨額であった。

2) 清州から文義へ

大隊本部の軍資金を運んで、12月1日に清州に入った「従軍日誌」筆者の兵士は、日誌に次のように記す。

明治二十七年十二月一日、前八時十五分、清安発足。后五時清洲に着す。前に竜山にて別行せし第一小隊鉄道測量護衛隊、三木軍曹以下十余名に面会す。この所に鎮南兵営とて、朝鮮の鎮台あり。兵一千人有……城砦は石壁なるも多く崩破せり……。

この忠清道地域、清州、報恩、文義、沃川を中心とする中央部山岳地域の北接東学農民軍の抗日蜂起について、新しい史実を明らかにしたのは、申榮祐氏であった。申榮祐論文「北接農民軍の公州 牛禁峙・連山・院坪・泰仁戦闘」(『韓国史研究』154, 2011年)、「東学農民戦争期報恩一帯とブクシル戦闘」(1993年)など⁶⁹⁾を参考に、「従軍日誌」に記されている事柄を検証しよう。

北接東学農民軍が起包したのは、10月16日であった。清州地域に集合した北接東学農民軍は、10月22日、清州城を襲撃し、4日後、10月26日に敗走する。北接東学農民軍の清州付近、第1回蜂起であった。この蜂起に敗北した後も、北接東学農民軍は、報恩その他で活動をつづけ、今回は強力な日本軍と戦闘をするためにも、ふたたび勢力を集めていた。

「従軍日誌」筆者の兵士は、上のように12月1日、清州城に入って、同じ中隊の第1小隊の鉄道測量護衛隊、三木軍曹以下10余名に再会。清州城に鎮南兵営という地元の軍団があり、「兵一千人」が居ると記した。城砦は、石壁があったが、「多く崩破」していた、という。

申榮祐氏の上に掲げた研究によれば、日本軍後備第19大隊が朝鮮に着いた11月7日ころ、北接東学農民軍は、約4万名と推定される大軍を、忠清道、^{カンウォンド}江原道、^{キョンギド}京畿道、慶尚道などから、北接の本拠である忠清道報恩などの地域へ集めた。北接指導部は、この東学農民軍を、二手に分けた。一手は、全羅道の全瑋準指揮する南接東学農民軍主力と連合するために公州へ遠征した勢力である。その指導部には、前に見たように利川^{イチョン}や安城^{アンソン}などを本拠とする京畿道東学農民軍がいた。申榮祐氏は、公州で「南北接連合東学農民軍」が戦ったと述べている。この南北接連合農民軍は、日本軍と朝鮮政府軍——日本軍第2中隊長、森尾雅一大尉に指揮されていた——の合同軍と第2次東学農民戦争の最大の激戦、公州戦争を闘う。もう一手は、忠

清道報恩などの地域守備隊になる北接東学農民軍であった。忠清道東学農民軍地域守備部隊は、報恩、文義、沃川、さらに永同ヨンドンや黄澗ファンガン、青山チョンサンなど山岳部各地を根拠地とした。この北接東学農民軍地域守備部隊も、約2万名の大勢力を編成した（地名の位置ついて、地図1）。

一方、日本軍「東学党討伐隊」の中路隊、すなわち後備第19大隊第3中隊と大隊長の大隊本部は、ソウルを出て龍仁ヨンイン、陽知ヤンジ、竹山チュクサン、鎮川チンチョン、清州と南下してきた。日本軍討伐隊の後備兵中隊と大隊本部隊は、中隊が後備兵221名、本部隊が後備兵56名で編成される制度であった。合計人数、277名である。また、後備第18大隊第1中隊の1小隊、そして巡查「若干名」も参加したと南大隊長は、「東学党征討経歴書」（山口県文書館所蔵）^{70）}に記している。日本兵士は、あわせて約300名であったと推定される。朝鮮政府の京軍、教導中隊316名も同行していた。清州では、地元の鎮南營兵、100名が参加。こうして大隊本部第3中隊の全軍は、日本兵約300名と朝鮮政府軍400名余、あわせて約700名余と見られる。全体の指揮権は、日本軍指揮官が持っていた^{71）}。

この忠清道、北接東学農民軍地域守備部隊と日本軍討伐隊、大隊本部第3中隊は、文義ムニと沃川フドク、懷徳、青山、永同など山岳地域で激戦を闘うのである。忠清道文義・沃川の大溪谷を中心とする山岳部における第2次東学農民戦争である。地形の全貌は、地図4に掲げた。

南小四郎大隊長の「東学党征討略記」や各「戦闘詳報」、韓国側の「巡撫先鋒陣騰録」などによって第2次東学農民戦争を検証したのも、申榮祐論文「1894年東学農民軍の清州城占拠の試図」である^{72）}。

ソウル出発時の大隊本部第3中隊の当初の作戦予定は、「3道分進中隊宿泊日割予定表」に記されている^{73）}。中央部西よりの中路を、まず京畿道を南下、進軍の6日目、11月18日に、忠清道に鎮川から入る。以後、11月19日に清州、20日文義、21日増若チュンヤク、22日赤登洞チョクトウンドン、23日永同チュボン、24日秋風峠で忠清道を抜けて西南部の慶尚道へ入る予定であった。わずか5日間で忠清道の北接東学農民軍討滅を終える計画であったのである。ところが、作戦予定は、忠清道へ入る前から遅延していた。

清州に入るのは、11月22日。文義へ入るのは、23日、3日遅れであった。この後、11月21日に入る予定であった増若には、30日。次には、沃川と永同の間にある「赤登洞」に当初、22日に入る予定で、実際には、赤登洞手前の沃川に入ったのが12月1日。沃川を出るのは、同月6日になった。14日遅れて沃川を出たのであった。中路の忠清道討伐作戦は、ソウル出発時の予定では、見たように、総日程5日であった。それが、18日をかけて、ようやく沃川を出て、いまだ忠清道のなかを進軍していた。

一方、軍資金を運ぶ「従軍日誌」筆者の東路隊第2小隊第2分隊が、清州へ入るのは、大隊本部第3中隊が、遅れて沃川へ入った、まさにその日、12月1日であった。

3) すべて東学農民軍、焼き払われた文義・沃川の村落

「従軍日誌」の12月2日、清州から文義まで進軍する部分を見よう。文義へは、清州から真南に無心川^{ムシムチョン}を下がって行く——上流へさかのぼる——。左右は、山岳にはさまれた平野で、文義まで直線距離で約14キロである。

同月二日、前七時三十分、清州発。是より沃川に至るの間は、東学の組員多きと、三木軍曹の報に依て、一^(ママ)曾警戒を厳にし、且つ前日第三中隊通過の際、多数の東党を撃退せし由。后四時に至り、文義郡に着す。その夜中、殊に警備嚴重、各所を視察し、その夜、沃川え向け、韓人の人夫を以て大隊え通報せし所、則ち大隊本部より、香川軍曹以下、卒十名を引率、十二時三十分、当文義迄金櫃迎として来れり。清州、文義間は、行程四里半。

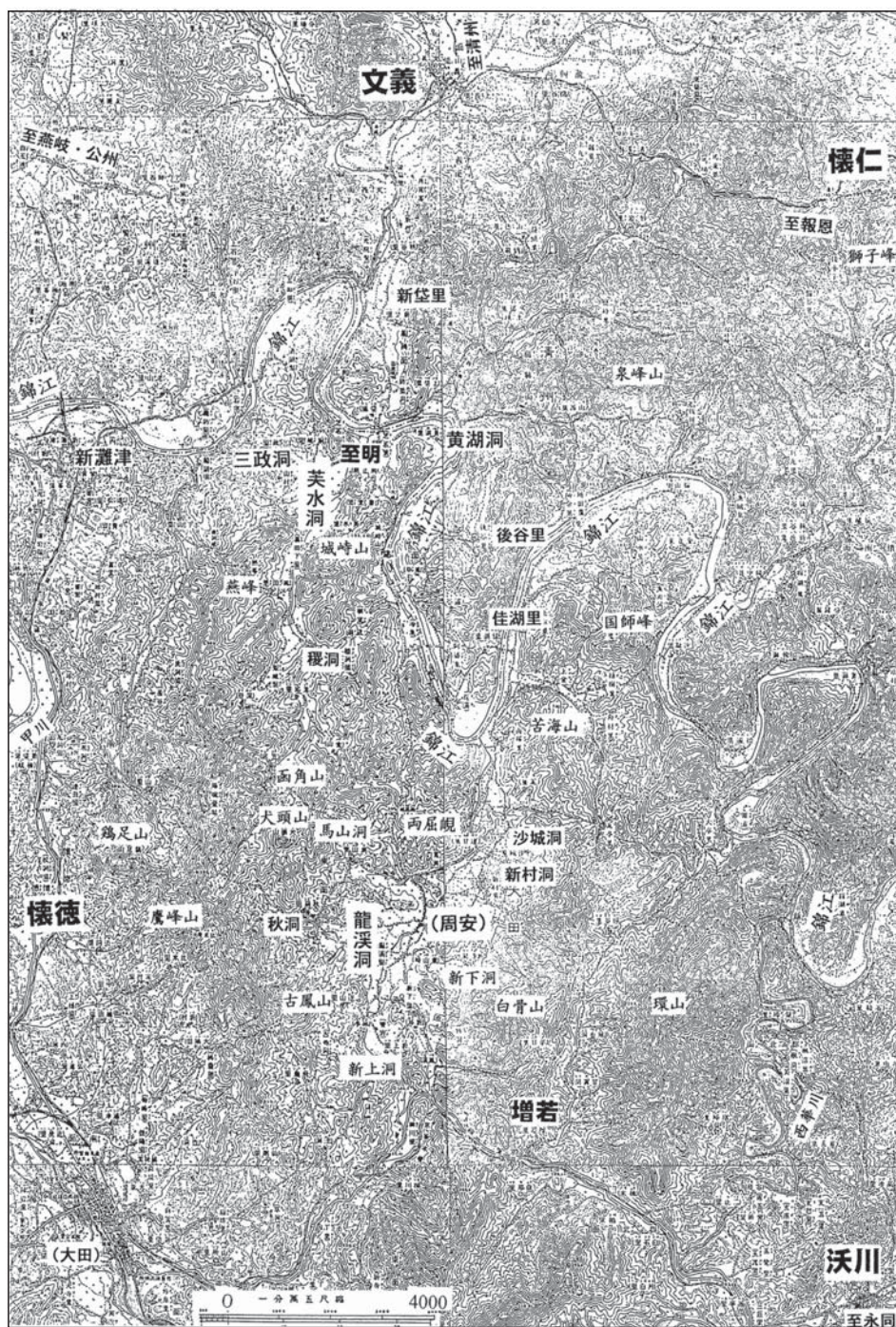
清州で、日本軍軍曹から、沃川までの間は、東学農民軍が多いと警告された。軍資金を運ぶ第2分隊は、警戒をしつつ、夕刻、文義に着いた。夜中、とくに「警戒嚴重」。また、第3中隊が「多数の東党を撃退せし由」と、聞くのであった。

ついで12月3日の条では、沃川に着いて大隊長本部隊と出会う。文義からは、狭い大溪谷に入ってしまったすぐに南下。今、大清湖の見晴らしで知られる新垈里^{セダリ}を経て、芝茗里^{チミョンニ}（日本軍は、チミョン^{チミョン}と記した）の村で錦江^{クムガン}に出る。錦江は、溪流を大きく蛇行させつつ山岳地帯を東南へ永同へとさかのぼる。これらの溪谷や山道は、現在すべて忠清道南部に広がる巨大なダム湖、大清湖^テの湖底である。

文義と沃川は、地図上の直線距離で23キロ、日本里で6里弱。行路は、南方向へ約20キロ南下した後、増^{チュンジュク}若^セの手前、新上洞^{セサンドン}から約8キロ、東へ曲がる。現在の地図では、錦江の大溪谷や盆地は水没して図上に記されていない。1910年代に旧総督府が作成した五万分の一地形図を、当時を復元する研究資料として活用し、地図4を掲げた⁷⁴⁾。当時の沃川への道は、後で掲げる1893年参謀本部制版の20万分一地形図（後掲の地図5）の記入では、地図4の至明から錦江西岸にほぼ沿って城峙山^{ソンチサン}の東下、右脇を南下し、ついで冷泉^{ネンチョン}の下で、地図では点線で記される山あいの道に入って馬山洞^{マサンドン}と両屈峴^{ヤンクリョン}の間の峠——今、湖面上に浮かんでいる——を越えて龍溪洞^{ヨンゲドン}、周安^{チュアン}の広い盆地に入る。盆地の南端にある新上洞から東へ折れれば、増若、沃川に至る。第3中隊本部隊もこの道と、その左右を中心に進軍したのである。

「従軍日誌」には、文義から沃川までの村落の惨憺たる様子が記されている。

同三日八時、出発。則ち、迎隊、香川軍曹及以下兵卒と共に沃川に向ひて行進す。文義より沃川に至る間の村落、悉皆東学党に組し、去る十一月二十九日、第三中隊の爲めに退撃せられ、故に六里間、民家に人無く、また数百戸を焼き失せり、且つ死体多く路傍に倒れ、



五万分の一地形図。下の広域図6枚を約50パーセント縮小、文義・沃川を入れた。
「米院」1914「清州」1914「儒城」1915「報恩」1914「太田」1917「沃川」1915

地図4 文義・沃川戦闘の広域図



「南部」の「公州」の一部（防衛研究所図書館千代田文庫所蔵）
・韓国中央部山間部，清州，文義，沃川，報恩などの位置関係を知ることができる。
・領事館付武官による秘密測量のため近代的測量としての厳密さに欠ける。

地図5 1893年製版，参謀本部陸地測量部，20万分の1「朝鮮全図」

犬鳥の食ふ所となる。

この山岳部を「従軍日誌」筆者の第2分隊は，文義から沃川まで8時間で進軍している。記述は，短い。しかし実に貴重な現場報告である。「従軍日誌」筆者は，文義から沃川までの村落，「悉皆東学党に組し」と，住民ことごとく東学農民軍に参加していたと記した。その地域，「六里間」は約24キロであり，文義と沃川間の全地域を指しているのである。そして，去る「十一月二十九日」の第3中隊の「退撃」，その「故に」，すなわち11月29日の第3中隊の農

民軍撃退のために、文義から沃川まで民家無人、さらに、数百戸が焼き払われ、路傍に死体多くが倒れ放置されているという凄惨そのものの状況である。

記述は、これまで知られなかった事柄が含まれている。記述が正確であるか、検証し、同時に、東学農民戦争の史実を闇から掘りおこす必要がある。

後備第19大隊大隊長が残した「東学党征討略記」や「東学党征討経歴書」、また中隊長の日本公使館宛の「戦闘詳報」—— 詳報というタイトルと違って、簡略な公式報告書 —— には、こうした東学農民軍の被害の具体的状況は、記されていない。南小四郎大隊長は、証言「東学党征討略記」や記録「東学党征討経歴書」において、東学農民軍は、未開な「暴民」と見ており、東学農民軍の兵士の被害には目を向けない。

全体的に言えば、この筆者兵士の農民軍被害状況の記述は、正確だという根拠がある。根拠の一つは、「従軍日誌」、12月3日記述の上の引用文の続きである。

この日迄、都合七日の行軍中、金櫃を背ふ韓人、二十九名、駄馬三頭、而して、その牛馬は能く歩進すと雖とも韓人夫は東党に恐れ、進行を否む者多し。依て護送中、監守に困却、筆に尽し難し。而して沃川に着せしは午后四時、大隊に金櫃を引渡し、官宅に泊し、その夜、友人杉野虎吉に面会し、戦闘の話種々、且つ是迄の困苦を語合ひ数時間に及ぶ、大隊本部より朝鮮酒及牛肉を多く給えり。

「韓人夫は東党に恐れ、進行を否む者多し、依て護送中、監守に困却、筆に尽し難し」という記述は、説得力がある。文義・沃川の東学農民軍は、日本軍の荷をはこぶ朝鮮人人夫を恐れさせたであろう。この「監守」に最前線の日本兵士—— 徴兵された農民 —— たちは、筆に尽くせない困却をしたのである。沃川で、その夜、第3中隊に居た杉野虎吉上等兵に面会した。

杉野虎吉は、拙著『明治日本の植民地支配』などでも説明したように、徳島県阿波郡香美村出身の後備兵で、やがて12月11日、進軍した連山の戦闘で、3万名と見られるほど大軍の東学農民軍と戦った。正面から進撃する水原小隊（水原熊三中尉、小隊）に属して闘い、東学農民軍の銃弾が顔面の^{あご}顎に当たって戦死した。筆者兵士と面会した8日後である。後備第19大隊、660名以上の兵士中、ただ一人の戦場での戦死者であった⁷⁵⁾。日清戦争の翌年、徳島県が編纂した『阿波戦時記』に杉野虎吉の経歴が記されている⁷⁶⁾。

上等兵、杉野虎吉は、阿波郡市香村大字香美村農、常吉の弟にして、安政五年十月七日を以て生れ、二十七歳の時、先入兵として兵役に服し、後備の籍に在り、其家昔時は富裕なりしも近年衰頹して家屋及宅地を有するのみ。虎吉帰休後、別居して妻たねと共に独立商業に従事す、二十七年七月召集に応し……

阿波郡香美村^{かがみ}の没落した小作人の次男であり、1858（安政5）年生れ、戦争当時、阿波郡の旧撫養街道^{むよう}の近くで農商を妻と二人で営んでいた。撫養街道南脇の香美共同墓地で見出した虎吉追悼碑は、高さ160センチ、地元の砂岩で造られた碑は、存在を忘れられ、風化により激しく破損しており、香美村には杉野虎吉の縁者は、すでに住んでいなかった⁷⁷⁾。

筆者兵士は、その後、進軍する南原^{ナムオン}で、次のように杉野虎吉の戦死を聞いたと記す。

同（12月）二十八日、同所（南原）滞在……不幸にも我中隊に付す杉野上等兵、去る十日、連山の戦ひ、敵弾に中り戦死せりと聞き、驚愕落涙、水魚の友を失ひ、悲嘆せり。

「水魚の友」、幼なじみであった。沃川に戻ると、忠清道沃川で、東路隊の「従軍日誌」筆者兵士は、中路隊の杉野虎吉と出会って、次のように記していた。「友人杉野虎吉に面会し、戦闘の話種々、且つ是迄の困苦を語合ひ数時間に及ぶ」と。

南小四郎大隊長の「東学党征討経歴書」は、南大隊長が司令部である南部兵站監に提出した簡潔な日記体の報告である⁷⁸⁾。東学農民軍討伐作戦で、大隊長として中隊の下士官たちに出した進撃命令を、命令だけを、断片的に記している。「友人」杉野虎吉は第3中隊で水原熊三中尉の小隊に属していた。この水原小隊の進軍経路が、「東学党征討経歴書」の南大隊長命令からつぎのように分かる。

京畿道^{チュクサン}の竹山縣に滞在していた11月17日、水原小隊は、朝鮮政府軍兵（教導中隊の1小隊）とともに、北接東学農民軍の本部があった忠清道の報恩へ派遣される。報恩は、大隊本部第3中隊の進軍路になる文義から東へ約20キロ離れている。24日、水原小隊は、文義滞陣3日目の大隊本部第3中隊へ戻る。つまり水原小隊は、北接の本拠地である報恩方面において1週間の討伐をしたのであった。ついで28日、水原小隊は懷徳^{フエドク}方面へ派遣された。懷徳は、地図4と地図5のように、文義から南下して、沃川へ東へすすむ山道の反対方向、約6キロ西にある村である。懷徳へ進撃した2日後、30日、水原小隊は、懷徳と沃川の間にある増若村で、大隊本部第3中隊に合流した。

こうして、杉野虎吉上等兵がいた水原中尉小隊は、竹山から報恩、文義、懷徳、そして増若、沃川へと転戦していた。「従軍日誌」筆者は、11月29日の討伐戦で、文義と沃川の間の東学農民軍が退撃されたと記したが、水原小隊は、まさにこの日、29日、その地点、文義と懷徳のあいだで戦闘して増若に入った。「従軍日誌」の記述は、「去る十一月二十九日、第三中隊の為に退撃せられ、故に」であるが、その第3中隊の撃退の戦闘のただ中に、水原小隊の杉野虎吉も居たのである。その杉野虎吉と、「陣中日誌」筆者兵士は、4日後の12月3日夜、「戦闘の話種々、且つ是迄の困苦を語合ひ数時間に及」んで、同日に、11月29日第3中隊討伐戦の記事を記した。中隊を異にした二人の上等兵は、戦闘の「困苦」を詳細に語り合ったので

あって、指揮命令する下士官たちのように、「百發百中、実に愉快」（『宇和島新聞』東学農民軍との洪州の戦いを知らせる町田軍曹の郷里宛手紙⁷⁹⁾）などを報じたのではなかった。討伐戦最前線で実際に戦場を駆けずり回って東学農民軍と撃ち合い、東学農民軍を銃殺、殺戮し、東学農民軍が占拠していた村落の、筆者兵士がしばしば記すように、恐れ逃げる農民の民家を焼き払い、討伐戦の「困苦」を自身、実践した兵士の29日の現場の証言なのである。

「従軍日誌」の12月3日記述は、このように兵士についての検証から全体として正確だと見られるのである。

4) 文義・沃川戦争 溪谷と山岳地帯の戦い

兵士についての史料探査は、いわば状況証拠である。ついで日本軍の資料を検証して、文義から沃川での農民戦争の本体を実証的に復元しよう。

大隊本部第3中隊が文義に入ったのは、11月23日であり、沃川を出て錦山^{クムサン}へ向かうのは、12月6日であった。14日間、文義と沃川の間で、「数万名」（『東学党征討経歴書』）の北接東学農民軍と日本軍大隊本部第3中隊との戦闘があった。一地域の戦闘としては、長期間の東学農民戦争であった。いま文義・沃川戦争と呼ぶ。戦争の規模は、期間だけでは計れないのだが、農民戦争最大の戦闘と言われた有名な公州戦争は、戦闘休止時期があり、実質の戦闘期間は7日間であった。

公州は、文義の西方、30余キロにある（地図1）。その公州戦争と中央山岳部の文義・沃川戦争とは、お互いに関係していた。

公州戦争が一時休止していた11月25日、公州の日本軍西路隊から中路を文義まで進んでいた南大隊長へ、「公州城危急」の報せと、至急来援要請がなんども入る。仁川兵站監部も救援を指令してきた。そのため翌26日、大隊本部第3中隊は、中路を離れて西方へ転じ、燕岐^{ヨンギ}街道に入って、公州城の援軍に向かった。燕岐街道は、地図4の左上方にある。その夜、燕岐里手前の村に泊まった。ところが同夜、背後の増若で北接東学農民軍がふたたび大蜂起して、後方へ残留させていた日本軍小隊が清州まで退却したとの報せが届く。そのため翌27日、大隊本部第3中隊は、再度反転して文義へ戻る。大隊本部第3中隊の文義への退却から、文義・沃川の間の戦争は、12月6日までさらに10日間つづいた。ちなみに公州戦争が終わるのは、その翌日、7日である。

大隊本部第3中隊の、最初の文義への南下から、至明の戦い、日本軍の公州救援のための西方への転回、東学農民軍の再蜂起と北上、日本軍の文義への退却という紆余曲折した経過の全貌について、申榮祐氏が論文「1894年 東学農民軍の清州城占拠の試み」で詳しく検証している⁸⁰⁾。その成果にも学びつつ戦闘全体を見てみよう。

11月23日、大隊本部第3中隊が、清州を夜1時30分に出発、深夜をついて南下した文義

の緒戦にもどって、戦闘の展開にそくして整理しよう⁸¹⁾。

東学農民軍は、文義の南、山々に囲まれた溪谷にある要地、至明で日本軍を待機していた。東学農民軍の反撃は強力で地雷も敷かれ、日本兵一人が実際に地雷で負傷した（「文義付近戦闘詳報」490頁など⁸²⁾。大隊本部第3中隊は、東学農民軍を沃川手前の増若まで撃退するが、やがて文義へ退いた。翌早朝、小隊を増若へ派遣して、農民軍が山岳と溪谷を迂回して北上し、日本軍の背後へまわるのを防いだ。現在、至明の戦場跡は、大清湖の湖底に沈んでいる。湖北の一方、西岸の三政洞サムジョンドンと湖中央の島、黄湖洞ファンホドンの間の湖底である。なお大清湖は広大で、地図の稷洞や函角山、犬頭山、秋洞、古鳳山が西岸に、城峙山や馬山洞は半島になった。

ついでその2日後、前述のように11月25日、公州の第2中隊から全琫準らの南接東学農民軍の勢いが盛んで「形勢極めて危い」と救援要請があいついだ。実は大隊本部第3中隊自身も、北接東学農民軍の盛んなことに「困却」しており、東学農民軍が文義へ再北上して、日本軍の「背面を切断」することを恐れていた。しかし26日、仁川兵站監部からも急報があり、1支隊を後方となる沃川方面へ残して背後を警戒しつつ、公州へと燕岐街道を進んで、燕岐里の手前、龍湖里ヨンホリ（日本軍は龍浦村ヨンポと記した、「東学党征討経歴書」）に宿泊した。そして同夜、この沃川方面へ残した1支隊から、先述のように東学農民軍「数万名」（「東学党征討経歴書」）が沃川方面で大蜂起したと、つぎのように報せが入る。

沃川方面に退いていた北接東学農民軍は、本軍、左翼軍、右翼軍の3つの軍陣を敷き、2つの軍が日本軍に激射する間に、右翼軍が山岳をたどって北上した。東学農民軍は、山々から「兵少なし、取巻」と大声をかけながら北上。朝鮮政府軍の教導中隊や鎮南兵は、戦意無く——もともと日本軍の指揮に強いて入れられていた——、沃川方面に残した中路軍支隊は、至明から文義、清州城まで退却した。文義の農民の大半が東学農民軍に加わった（「増若付近戦闘詳報」）、と知らせた⁸³⁾。

このように沃川方面で東学農民軍がふたたび蜂起、北上した。残留支隊清州退却の報せで、大隊本部第3中隊は、文義へと戻ったのである。沃川方面で蜂起したのは、「一万以上の敵」であり、日本軍「費消弾丸、一四三二発」（「増若付近戦闘詳報」）、あるいは、「賊徒数万、弾丸為に欠乏」（「東学党征討経歴書」）であった。「東学党征討経歴書」は、「賊徒数万」、そのため、弾丸が欠乏したと説明している。

「大小五十余の旗を立て」という日本軍支隊の戦闘詳報などからも、申榮祐氏は、数十の接組織——東学農民軍は接名を記した旗の下にまとまった——が参加していたのであり、「忠清道だけでなく、京畿道、江原道、慶尚道などから」集まった北接東学農民軍だったことを確認している。北接農民軍の戦法も高度で、「朝鮮の戦闘方法」だったと述べる⁸⁴⁾。

文義・沃川の北接東学農民軍が、戦闘の意志盛んであり、行政単位の道を越えた農民軍が参加しており、戦法も高度であったという申榮祐氏の分析は、きわめて低く評価されてきた北接

東学農民軍像を改め、再評価するものであった。それに学びながら、付け加えるとすれば、次の点である。公州へと救援に進軍することを説明した南大隊長は、次のように述べた⁸⁵⁾。

公州と文義の間は、山嶽丘陵これを阻て、且つ彼の東徒中、乱暴者の呉一相^{オイルサン}の徒、この間に潜伏し居るやも知るへからず、若し彼にして、この間に在りて、後方に洩るる時は

大隊長は、公州へと向かうあいだも、「背面を切断」する東学農民軍の現れるのを恐れたと述べ、具体的に文義・沃川北接東学農民軍の指導者の名前をあげた。呉一相^{オイルサン}という指導者を名指しし、「彼の東徒中、乱暴者」と述べる。

呉一相は、実は9月23日、忠州において、朝鮮政府の宣撫使から可興の福富大尉に渡された、前述の「忠清道東学党巨魁人名録」に名前が記されているのである。文義の指導者、接主として、呉一相と朴桐瑩^{バクトンヨン}の2人が記されている⁸⁶⁾。このように呉一相は、9月にすでに文義の接主として登場していた。「彼の東徒中、乱暴者」とは、東学農民軍のなかでも、抜きんでて戦闘意志が強く、熟練した指導者という意味を含む言葉であろう。至明の戦いにしろ、増若の戦いにしろ、この文義の指導者呉一相と北接東学農民軍は、文義と増若、沃川の間を、溪谷や山岳の地理を利用して、縦横に往来して活動していることが分かる。そういう指導者を地元の文義が生み出しているということは、文義と沃川の間にも、地域の分厚い東学農民軍参加者がおり、その支持者の基層が広汎に存在していることを示している。この状況のなかで、南大隊長は、「我背面を断たるるの恐れ」（11月23日文義戦闘にて）、「背面を切断せらるるの恐れあり」（11月26日燕岐街道にて）と述べたのである。

また大隊長が公州へ転ずる際に、後方で再蜂起を防ぐために残留させた1支隊の少尉は、「増若付近戦闘詳報」で北接東学農民軍の次のような戦いを報じていた⁸⁷⁾。

敵（東学農民軍）の右翼軍は、山を伝ひて文義方面に進行し、本軍と左翼軍は、我兵（日本軍1支隊）に向ひ一斉急射をなす、是に於て、韓兵（朝鮮政府軍）は怖れて退却す、敵はこれに勢を得て、山々より兵少し取巻との大声を發し、益々北進す

北接東学農民軍は、山々に登って（高地から）、「山々より兵少し取巻との大声を發し」た。語句を補って読めば、「（日本兵は）少い、取り巻け」との大声を發して北進した、と。ここには、日本兵の弱点をついた戦法が認められる。武器は破滅的な程に劣勢であったが、東学農民軍は地元を知悉し、地の利も得ていたのである。数が圧倒的に少数の日本軍は、東学農民軍の大海に囲まれて、孤立させられる危険が実際にあった。大隊長や少尉がのべている「恐れ」や「困却」は、言葉通りの恐怖であったであろう。「従軍日誌」筆者の、「文義より沃川に至る間

の村落、悉皆東学党に組し」という文言は、事実そのものと思われる。

また、「増若付近戦闘詳報」の、短く補足されている次の部分も注目される。沃川方面に残留していた1支隊が文義から清州へと、26日深夜零時に、退却する部分である（「同上」）。

四（戦闘詳報の第4項目）、鎮南兵（約三十名一原注）文義に在り、その隊長来り云く、敵（北接東学農民軍）の一隊は、燕岐道を塞ぎ、一隊は清州を衝かんとす、依て（日本兵の支隊は）清州に引き返し、敵を防止せんと欲せり……。

注目したいのは、文義へ北上した東学農民軍の一隊が燕岐道をふさいだという、地元をよく知っている韓国鎮南兵隊長の言葉である。南大隊長は、先ほど見たように燕岐道を公州へ向かう時に、北接東学農民軍、とくに呉一相らの農民軍が背後に迂回して現れることを恐れていた。まさにその戦い方を、北接東学農民軍はとっていた。燕岐道を公州へと危急救援に進む大隊本部第3中隊の、その後ろから、報恩、文義、永同、黄澗にとどまっていた地域守備北接東学農民軍が、大軍で追跡してくるという事態が現出していたのである。大隊本部第3中隊が燕岐街道を引き返したのは、南大隊長の必要な判断であったと思われる。

かつて私は、拙著『明治日本の植民地支配』で、この文義へ引き返した南大隊長を、「第3中隊は、龍浦村で泊まった時、実は公州にわずか20キロ余の距離まで近づいており……南大隊長は、（沃川から錦山への）悪路で苦闘して、二週間も山岳部をさまよって公州の戦いにまにあわず……」と説明した。文義・沃川東学農民軍の役割は、南大隊長の公州への合流をくい止めたことに求めていた⁸⁸⁾。しかしそれは、文義・沃川東学農民戦争について、その意義を等身に評価したものではなかったと思う。文義・沃川戦争において、大隊本部第3中隊は、文義と沃川、燕岐との間を東奔西走させられ、ある時は退却すらくり返した。「彼の東徒中、乱暴者」と南大隊長を恐れさせた地元出身の指導者がおり、文義・沃川のあいだの村落のことごとくが東学農民軍であり、しかも江原道、京畿道、慶尚道など道をこえて農民軍が集まってもいた。文義・沃川の北接東学農民軍は、公州の南北接連合東学農民軍と肩をならべる力量をもっていたのである。

その結果、文義・沃川の6里、24キロの大溪谷と山岳部において、東学農民戦争は、14日間の異例の長期に及んだのである。文義・沃川戦争は、それ独自の意義をもった大きな東学農民戦争であった。

5) 11月29日の意味

兵士の「従軍日誌」は、次のように文義・沃川の状況を記していた。「去る十一月二十九日、第三中隊の為に退撃せられ」と。つづく文章をもう一度確かめると、「故に六里間、民家に

人無く、又数百戸を焼き失せり、且つ死体多く路傍に倒れ、犬鳥の食ふ所となる」。

文意は明確であり、かつ重い。去る11月29日、「第三中隊の為に退撃」されて、その「故に」——「従軍日誌」筆者が文義と沃川の6里の間を四日後の12月3日に、軍資金運搬を担当して沃川まで通ったところ——、民家に人が居なくて、また数百戸の家が焼き払われ、かつ死体が多く路傍に倒れたまま放置されていたという。11月29日、今は大清湖に沈んだ文義と沃川間の溪谷と山道で、「第3中隊」が農民軍を討伐した大惨劇があったのである。この「11月29日」の文義・沃川間の惨劇を検証しよう。

文義と沃川の間に厳密に限ってみると、後備第19大隊がかかわった戦争としては、地名を記した戦闘記録が残っているのは、次の二つの戦闘である。11月23日の文義付近戦闘（「文義付近戦闘詳報」）、また11月26日の増若付近戦闘（「増若付近戦闘詳報」⁸⁹）である。

11月29日の戦争については、『駐韓日本公使館記録』や「韓国東学党蜂起一件」、「南部兵站監部陣中日誌」などの、どこにも記録が残っていない。しかしこれは不可解である。見たように11月26日、西路隊、森尾第2中隊長の「公州城危急」との要請に応じて、大隊本部第3中隊は、西方へ転じて公州へ向かい、燕岐の手前で宿泊。そこで後方に残留させた支隊から、文義・沃川の間で東学農民軍大蜂起の報せが届く。27日、南大隊長は、危急にある西路隊に、公州城から一歩も出ないで「死守せよと命じ」て退却した。大隊本部第3中隊は、なによりも先に文義と沃川の間でふたたび蜂起した北接東学農民軍をただちに討伐して、ふたたび公州城救援に向かうことが緊急の課題であったのである。ところが大隊本部第3中隊の、緊急の討伐戦は、記録に残っていないし、知られてもいない。

「東学党征討略記」の大隊長の朝鮮政府での証言を、大隊本部第3中隊が公州城救援の途中を引き返すところから、次に掲げよう⁹⁰。

然れども直ちに行き、これを援ふ能はず、即ち命を發して曰く、只た城を死守せよ、一歩も出て、戦を許さずと、而して本隊（大隊本部第3中隊）は、沃川へ引上げたるに、東徒既に遁走して、沃川付近には一人も見ず。これを人民に質せば曰く、悉く錦山及珍山付近へ向け逃走せるなりと。尤も一枝隊は直ちに發遣したるか、増若付近にて捕虜二十四人を得、また途中にて殺したるもの、八人なりき。増若にて一泊、沃川にて一泊し……

文脈をみると、27日、大隊本部第3中隊が公州救援への進軍から退却し、公州城の第2中隊へ死守せよとの命を發したと述べ、ここから文義をとばして直接に「沃川へ引上げたるに」とつづいている。11月29日の文義と沃川の間の戦争は、触れられていないのである。大隊長沃川到着（12月1日）までの間が抜けている。

しかし、実は「従軍日誌」筆者が見聞し、杉野虎吉からも聞き取った、11月29日文義・沃

川討伐戦闘は、存在したのである。それを南大隊長が軍に提出した「東学党征討経歴書」から検証しよう。

「東学党征討経歴書」の文義への退却のところから、まず原文全文を掲げよう⁹¹⁾。討伐戦は、27日から始まっていた。

同二十七日、竜浦村出発（文義への退却）、再び文義縣着舎営、宮本支隊（少尉宮本竹太郎、沃川方面に残され清州まで退却した支隊）と合し、水原中尉を支隊として懷徳方面に出す、森尾大尉（公州城の西路隊）へ賊情により進路を沃川・錦山方向に転せし事を報ず、
同二十八日、支隊（大尉石黒光正一原注）に教導中隊の一小隊を付し、周安^{チュアン}（芝茗里と沃川の間の村）方面に出す。
同三十日、文義縣出発、増若駅着、舎営、石黒、水原両支隊と合す、
……

以上、文義へ退却した大隊本部第3中隊が、沃川手前の増若まで進撃する部分までを掲げた。沃川に泊まるのは、翌12月1日である。命令と行動が記されており、3つの支隊が出ている。それぞれは、ただ「支隊」と記されている。しかし同じ支隊でも、軍隊では、指揮官によって隊の規模がまったくちがう。27日、文義への退却当日に文義で収容した残されていた宮本支隊は少尉の支隊であり、小隊である。同日、文義から出軍させた水原支隊は中尉の支隊で、同じく小隊である。だがその翌日、28日、退却二日目にやはり文義から出軍させた石黒支隊はちがう。石黒光正は大尉で第3中隊長であり、これは第3中隊200余名を動かした命令なのである。

順に見てゆこう。27日、文義へ退却した日、大隊長は、東学農民軍北上という攻勢のために、至明から文義を越えて清州までも退却した宮本小隊を本部隊第3中隊に収容した。経歴書の「宮本支隊と合し」の部分である。同じ27日、文義から水原支隊を懷徳方面へ出軍させた。西南方、沃川の反対側の懷徳出軍は、迂回であり、つぎに見るように側面からの農民軍挟撃作戦であろう（地図4）。この隊に杉野虎吉が居たのである。

28日、文義から石黒支隊、つまり主力軍である第3中隊を、周安（後述するように沃川の手前）方面へ出軍させた⁹²⁾。この日、大隊本部と第3中隊は、別行動となり、離れた。この南大隊長本部隊と第3中隊の分離は、重要な事実である。

そして、2つの部隊を出軍させた後、問題の翌29日に記載はない。30日に、大隊本部が文義を出発、南下。石黒第3中隊が進撃した後を、増若まで進出して宿泊した。この日に石黒支隊、すなわち第3中隊と大隊本部が合した。本隊は、大隊本部第3中隊に戻った。水原小隊も、本隊に合した。水原小隊は、西方から進撃、北からの石黒第3中隊と合流した。30日、各隊

が増若に集合して宿泊、12月1日、沃川へ宿泊。そして3日、沃川へ「従軍日誌」筆者兵士が到着したのである。

注意してみると、11月29日、前日に出軍した第3中隊は、大隊本部から離れて単なる「第3中隊」になって文義から、つまり北から増若方面へ進撃中であつた。一方、懷徳、西方から進軍した水原小隊——杉野虎吉も居る——も増若へ進撃した。中隊と中隊に属しているが、西方の懷徳へ派遣された小隊は、地図4の龍溪洞がある盆地付近において出会うはずである。こうして戦局を見ると、この29日に東学農民軍討伐の作戦が展開したという「従軍日誌」の記述がよく分かる。その主戦場は、今は湖底に沈んだ、この大清湖南部の盆地だつた。「従軍日誌」の「第三中隊の爲めに退撃」という記述は、正確だと推測される。

もう一度、確認しよう。「去る十一月二十九日、第三中隊のために退撃せられ、故に六里間、民家に人無く、また数百戸を焼き失せり、且つ死体多く路傍に斃れ、犬鳥の喰ふ所となる」と「従軍日誌」は記していた。それまで、「従軍日誌」筆者は、かならず「大隊本部第三中隊」と記していたのだが、ここでは、単なる「第三中隊」と記しており、それが、正確なのである。

地図をみると、文義からまっすぐ南下し、至明から城峙山の東脇を下り、溪谷に沿う道をたどり、ついで山道に入り、峠を越えて北から龍溪洞などの盆地へ入る。懷徳に出ていた水原小隊も西から増若へ向かい、「第3中隊」石黒中隊長の進撃に合流したのである——地理から言えば、二つの部隊の合流点は、この盆地であろう——。水原小隊は、農民軍が西方へ進むのを防ぎつつ、北からの石黒第3中隊とともに、農民軍を挟撃したのである。やはり、「従軍日誌」が記していた11月29日、「第3中隊」の大規模な、そして凄惨な東学農民軍「退撃」が存在したのである。言うまでもなく、水原小隊自身も「第3中隊」である。

こうして分かるのは、南大隊長が「東学党征討略記」で述べた、「増若付近にて捕虜二十四人を得、また途中にて殺したるもの、八人なり」という証言では、「殺したるもの」の人数が8人と、あまりに過少だという事である。南大隊長は、朝鮮政府で証言した「東学党征討略記」において、自身が出軍させた石黒中隊長、水原小隊長が指揮する第3中隊やその小隊が文義から懷徳、沃川へ進撃し、凄惨な討伐を行ったことに触れなかったのである。

この第3中隊進撃で、文義から沃川への溪谷と山道において、兵士の見聞の範囲でも、「数百戸の家々」が焼き払われた。北接東学農民軍の死体は多く、それらは路傍にそのまま放置された。「従軍日誌」筆者は、それを4日後に目撃し、あるいは聞き取って記した。11月29日、文義と沃川の間で、後備第19大隊第3中隊による、凄惨を極めた東学農民軍に対する追撃戦争は、存在した。その事実は、つぎのような石黒大尉中隊長の墓碑発見によってさらに確かめることができる。

前述したように、高知市小高坂の中腹に「石黒光正墓」が残っていた。高知大学の小幡尚氏に案内していただいて出会うことができた。高さ99センチ、木々の枝にはさまれており、管

理されていない、訪ねる人もない様子であった。左右と裏面の3面に、長文の漢文で碑文が記されている（写真2）。日清戦争従軍の軍歴も記されており、日清戦争時の軍歴全文は次のようである。

……以後備第十九大隊第三中隊長渡韓，擊東学党賊，入忠清道，繼文義・周安，至沃川途，而與賊遭遇而走之，翌年入全羅道轉戰，各地破之賊平，二月歸龍山……

第3中隊長の軍歴として、1894年には、文義、周安、沃川における戦いがとくに記されていることが注目される。文義、周安から沃川へ至る間で、東学農民軍と遭遇しこれを撃退したと言う。記されているように、「文義」、今、黄湖洞の島手前の湖底に沈んだ至明を中心として11月23日にはじまる戦いがあった。つづく「周安」、ハングルで「チュアン」は、どこにあるのであろうか。この地名は、1914年と1915年測量五万分の一地形図「儒城」^{ユソン}、「報恩」^{ボウン}にも、今のダム湖地域の地形図「大田」^{テチョン}、「報恩」にもない。

一方、拙著『明治日本の植民地支配』などで紹介したように、参謀本部は、実は1893年——日清戦争前年——に20万分一地形図「朝鮮全図」を完成させていた。その一枚「公州」の一部を地図5として掲げた。領事館付武官の秘密測量によったので不正確な部分も、とくに地名表記に、各所にある。この地図5で、清州、文義、増若、沃川、懷徳——水原小隊がここへ迂回した——、報恩、青山などの位置取りや道路、河川、山岳が分かる。このような地図の当時の日本軍全軍の作戦起案にとっての意義は、絶大であろう。中央下方、ゴシック体で補記した周安の左脇に「周安」の地名が右横書きで小さく記されている。北から、右横書きは小さく見づらいが、両屈峴、城山里、方秋洞とならんで「周安」、陽知村、三街である。地図4で、この地図5から周安の場所が比定でき、地図4に記入した。北の文義から石黒中隊が南下、西の懷徳から水原小隊が進軍すると、出会うのがこの周安を中心におく盆地である。馬山洞、秋洞、龍溪洞、新上洞、新下洞、新村洞、沙城洞で囲まれる盆地である。やはりこの盆地が激戦場になったのであろう。この石黒大尉墓碑の文言によって11月29日農民軍討伐戦は、証明されたと思う。戦場の主舞台は、今、犬頭山と古鳳山の山裾沖合に広がる大清湖南部の湖底である。つづく「而與賊遭遇而走之」という文章のように、文義・沃川農民軍は敗走させられた。

石黒墓碑によれば、翌年新春は、後備第19大隊全軍が進撃した「全羅道轉戰」である。これはよく知られている通りであろう。沃川から錦山への道はきわめて悪路で、第3中隊は、もっと深い山岳部の泥沼に入り込まされる。敗走した北接東学農民軍は抗戦し、同中隊の討伐戦は、このあとも、錦山縣、珍山縣、連山縣とつづいた⁹³⁾。珍山と連山は、東学農民軍が優勢だった縣であった——なお、石黒大尉、第3中隊長は、墓石にも記されているが、旧高知藩

士族であり、日清戦争終了後、^{ケソン}開城守備隊長に転任、1895年7月下旬、ソウルより北の開城で病没した⁹⁴⁾——。

6) 南原 —— 蛟竜山城，寺と民家の焼き払い ——

東学党討滅隊後備第19大隊第1中隊第2小隊第2分隊は、忠州へ戻って本隊と合し、小白山脈の鳥嶺を越えて、慶尚北道へ入る。最初の日本軍兵站部は、^{ムンギョン}聞慶である。これ以後、慶尚北道でも討伐戦を展開するが、ここでは略す。慶尚南道^{ハミョン}咸陽まで南下するのが1894年12月24日、ここから1000メートルを越える小白山脈南部の山々の峠を越えて、全羅南道^{ウンボン}の雲峰に入り、雲峰を12月26日に出る。

同（12月）二十六日、前七時発、南原地方え向て行進路を取る、壺里半、至る所に大山あり。山名、雲峰山と云ふ、山勢方錐の如く、岩石突立、蒼天に聳ち、岩間に通路あり。峰上より下視すれば、全羅・慶尚両道を一目にする如し。この嶺上に土民等多く集り、銃器を携、要所に歩哨を張り、東学進入の防禦をなせり。

雲峰は、保守民兵、民堡軍が支配を保ち、上の「従軍日誌」に記されるように、民兵が郡境の峠上の山岳に上がって東学農民軍を防いだ。その山岳を、朴孟洙氏、南原東学農民革命記念事業会、地元研究者たちと登り、雲峰の民堡軍が東学農民軍と戦った山頂を踏査した。雲の厚い天候であったが、一時、^{チリサン}智異山が現れた。解放後、パルチザン戦争など激動がくり返されてきた有名な山岳地帯である。雲峰民堡軍が石を積んだ砦跡が残っており、史跡として保存されている。

……后三時五十分、南原城に着せり。この城昔時、^{シルラ}新羅と称せり、地城にして式丈余の石壁四面を囲り、上に銃眼を鑿つ。城外二里方面は平坦なり、北に方り、壺里半去る所に龍城と名く、方式里余、町は壁石を囲周す、府使の別荘と見ゆ。要害、好しき地勢なるも、去る二十日東党の爲めに落城し、府使は殺され、市内の民家、悉く焼打し、立去れり。雲峰地方の土民等、兵器を持ち、南原城の東党を撃退し、城中に入る。東党は、北方^{ヨンソン}龍城古山^{ゴサン}に籠れり、我軍至るや、急に三道より攻撃を始む。東学、日本軍の至るを見るや、逃走しつゝ、銃声を発し応ず、このとき我軍急行、進んで山上に登り、石壁を越え、家宅を搜索するも、敵早く逃亡して、一人だも見えず。依て人家に火を放ち、南原に帰る。夜深更に至り、烟火未だ天空に輝光せり、この日夕に入り帰るを、舍宿は東党の爲め灰となるを以て、各兵不潔なる二三家に狭宿せり。

「従軍日誌」筆者の第1中隊は、南原に午後に着いた。この南原が後備第19大隊の合流地である。第1中隊は、南大隊長がいる本部隊より2日早く、南原に着いた。

「式丈余の石壁四面を囲り、上に銃眼を鑿つ。城外二里方面は平坦なり」。城壁2丈余と記される。2丈、6mである。日本支配時代に、かつて宏壮だった南原城の城壁は、すべて破壊され、現在北部に一部だけ城壁が残っている。北城壁の近くで城壁発掘調査がはじめられていた。

上の「従軍日誌」に記されているように、日本軍が南原へ迫るなかで、雲峰の保守民兵が南原東学農民軍を撃退した。東学農民軍は、南原の「北方」にある「龍城古山」に立て籠もった。

この「龍城古城」は、南原市の北西、直線距離約3キロにある蛟竜山城である。標高518メートル。百濟時代に築かれた城には武器貯蔵施設が、かつて在り、現在、城山中腹の平地に「武器庫跡」の標示が置かれていた。そのやや下部に、美しい石の城壁が3キロにわたってつづいている。上には善国寺があり、さらに頂上に近い場所で、東学創始者崔濟愚がしばらく滞在し、修行し、布教した遺跡地が残っていた。

この南原北西、蛟竜山城の攻防戦と日本軍の討伐は、今まで地元でも知られていなかった。

「従軍日誌」の記述を確かめておこう。立て籠もる東学農民軍をめざして第1中隊が進軍するのは、午後4時以降である。日本軍が迫ると、「急に三道より攻撃を始む」、これは、蛟竜山城に立て籠もった東学農民軍の応戦である。農民軍は、「逃走しつゝ、銃声を発し応ず」、逃走しながら日本軍に応戦した。「此とき我軍急行、進んで山上に登り、石壁を越え、家宅を搜索するも、敵早く逃亡して、一人だも見えず」。蛟竜山城の、現在もみごとに連なる石壁を越えて第1中隊兵は、登った。

日本軍は、「家宅を搜索」。しかし東学農民軍は、全員逃走していた。山の急斜面の家々は、今ほとんど現存しない。敷地跡が残るだけであった。

第1中隊は、「人家に火を放ち、南原に帰る」。その火は、「夜深更に至り、烟火未だ天空に輝光せり」。第1中隊は、夕方に南原へ帰った。第1中隊が夕方、放火した蛟竜山城の家々は、深夜になっても天空に烟火を輝かせていた、と記されている。南原からその炎が見えたということは、大規模な民家の焼き払いがなされたのである。

次に「この日夕に入り帰るを、舍宿は東党の為め灰となるを以て、各兵不潔なる二三家に狭宿せり」とある。この記事を目にする必要がある。夕方に、第1中隊が南原へ帰ると、実は、中隊の宿舎が東学農民軍のために放火されていたのだった。

蛟竜山城に立て籠もった東学農民軍は、いち早く全員逃走したのだが、ただ逃げたのではない。先回りして日本軍の宿舎を焼き払った。200余名の第1中隊は、12月下旬、真冬の宿舎を失った。南原東学農民軍は、地の利を活かして反撃したのである。

翌々日、28日、南大隊長に率いられた大隊本部第3中隊が、朝鮮政府軍の教導中隊と統営兵各一中隊とともに南原に入ってくる。大隊本部第3中隊は、31日まで南原に滞在。第1中

隊も31日まで南原に滞在する。「これ、東党搜索の為めなり」と記されており、街や村落で東学農民軍を搜索するために滞在した。

30日には、「従軍日誌」に、次のように記される。

同三十日、滞在。前八時より、先日焼払へる龍城山に至り、焼残せし寺院及其他の家屋を焼払ひ、東党の使用に適せざる様命令に付、即ち第一中隊は再び古城山に至り、寺院、民家を焼払えり。

第1中隊は、朝、四日前の26日夕方に放火し、深夜まで燃えつづけさせた蛟竜山城へ出軍し、焼き残した寺院その他の家屋を焼きはらい、東学農民の使用に適さないようにせよという命令をうけたのである。第1中隊は、ふたたび行き、焼き払った。すなわち蛟竜山城の寺院と民家を再度、徹底的に焼き払った。この蛟竜山城、徹底的焼き払いは、「従軍日誌」に記されているように、第1中隊に「命令」されたものであった。

誰の命令であるか明らかであろう。先ほどもみたように、後備第19大隊本部第3中隊が、滞在していたのである。第1中隊に命令することができるのは、同じ南原に居た大隊本部の南小四郎大隊長である。

南大隊長は、朝鮮政府で討伐作戦を証言した「東学党征討略記」で、南原の惨状について述べている。「南原の如き惨状は又他になかるへし、官舎も民家も一として満足なるものなし。官舎の如きはその土台より破壊したり」。そうして雲峰の民堡軍別軍監、朴鳳陽パクボンヤンをその下手人として、南原民産掠奪と放火を糾弾している。しかし、この大隊長自らが下した第1中隊への蛟竜山城に対する徹底的焼き払い命令については、「東学党征討略記」でも、また「東学党征討経歴書」でも、一切記していない⁹⁶⁾。

「東学党征討経歴書」では、蛟竜山城徹底焼き払い命令を出した同じ29日に、次のように記す——30日、第1中隊は、山城へ早朝に出軍する。命令は、前日、出ている可能性が高いのである——。

同二十九日南原府着、舎営、松木大尉及び水原支隊（第1中隊）と合す。雲峰縣監を初め、南原官吏え此際、兵炎に罹る者に就ては充分之れを撫育し、假令賊徒と雖も前非を悔ひ、良民となる者等を常業に服せしむる旨、懇篤説諭すへき事を示諭す

南大隊長は、雲峰の縣監——朴鳳陽とは別人、鳳陽の非行を訴えた一人⁹⁶⁾——や南原官吏へ、兵火にかかった南原の民への撫育と東学農民軍で前非を悔いた者への寛恕を説諭したと記す。これは29日記事の全文である。南大隊長は、朝鮮政府軍隊長や官吏に、東学農民軍へ

あまり苛酷に対処するなどが、「兵炎に罹る者」を撫育せよと説諭したという記事を多く残している。「東学党征討略記」や「東学党征討経歴書」の各所に、南大隊長説諭がくり返し記されている。

南大隊長は、証言において、城と民家の徹底焼き払いの命令を出したことを消し去り、寛恕や撫育説諭を加えているのだが、これは、討伐作戦の証言に大きな、改変、潤色を加えられていることを示している。南大隊長は、東学農民軍を未開の「暴民」「匪徒」と視ており、大隊長の命令によって殺戮され、「兵炎に罹る者」が厩大に生み出されているのだが、日本軍の行動を疑問視などしようともしていない。南大隊長の証言を読みとる際には、十分な史料批判が必要である。

12月31日、第1中隊第2小隊の第2分隊は、南原を出発し、午後谷城縣コクソンに着き宿泊する。途中、東学農民軍の「家屋数十戸を焼払」う。また、第2小隊長楠野少尉も、これとは別に斥候に出て、東学農民軍の「家宅数十戸焼き棄」てた。「この夜、東学十名を捕掌し帰り、韓人に命し、焼殺せり」。捕らえた東学農民軍を韓人、朝鮮政府軍兵に命じて、焼き殺した⁹⁷⁾。

4日には、洞福ドンボクから綾州スンジュへ進軍した。「我軍はその近村搜索し、東徒七八十名を捕え帰り、拷問せし所、各自白状に及び、依て軽きは民兵に渡し、擲払となし、重き者二十名計を銃殺す」。7、80名を拷問し、重いもの20名計を銃殺した。

12月5日、綾州に滞在、第1中隊は、「謀計」を使う。付近の村落で、朝鮮の民兵に命じて、我々は、東学であるが、今、日本軍が攻めてきた、「東徒」東学農民は、早く当所を立ち退け、と叫ばせた。東学農民軍の者、「数百名」が、銃器、竹槍をもって逃走した。民兵は、「ことごとく捕らえ」、日本軍に送ってきた。「ことごとく捕らえ」と記されている通りであるとすれば、数百名の東学農民軍を捕らえたのである。「分捕銃器」75挺、竹槍や弓は焼き払った、とつづくので、ほぼその通りであったと思われる。「捕虜は、詮議の上、軽きは追放に所し、重きは死に行ひ」という。詮議は、拷問であった。数百名に近い人数を拷問したのである。この日の殺戮が何名であったか、記されていない。こうして、翌1895年1月8日、南の海岸部の街、長興において、東学農民軍の最後の抗日戦争が展開する。

7) 兵卒 —— 貧困なる農民、後備兵 ——

この後も後備第19大隊を中心とする討伐は、苛酷さを加える。今は3例だけ掲げよう。

1895年1月8日から9日、朝鮮西南海岸において、長興チャンフンの戦いが起こる。東学農民軍の最後の大規模な組織的反撃であった。次は長興戦争時の「従軍日誌」の記事である⁹⁸⁾。

我隊は西南方に追敵し、打殺せし者四十八名、負傷の生捕拾名、而して日没に相成、両隊共凱陣す。帰舎后、生捕は、拷問の上、焼殺せり

記事の「兩隊」は、第1中隊第2小隊の第1分隊と「従軍日誌」筆者が居た第2分隊のことである。負傷した10名の東学農民軍を捕らえ、拷問の上、「焼殺」、焼き殺した。「尋問」は、ほとんどの場合、このように拷問であった。

「従軍日誌」筆者は、東学党討伐大隊の本部が置かれていた羅州^{ナジュ}へ、討伐をほぼ終結して2月4日に入る。南大隊長の大隊本部が一ヶ月置かれており、東学農民軍に対する処刑が行われていた。

南門より四丁計り去る所に小き山有、人骸累重、実に山を為せり。是は前日、長興府の戦後、搜索厳しき故、東徒居所に困難し、追日我家毎に帰らんとせしを、彼の民兵、或は我が隊兵に捕獲せられ、責問の上、重罪人を殺し、日々拾二名以上、百三名に登り、依てこの所に屍を棄てし者、六百八十名に達せり。近方、嗅気強く、土地は白銀の如く、人油結氷せり。如斯死体を見しは、戦争中にも無き次第なり。この東学党の屍は、犬鳥の喰所となれり。

羅州城の南門から4丁ばかりのところ、小さな山があった。「人骸累重」、小山をなしていたのである。戦いの後、日本軍は、朝鮮の民兵や日本軍自身によって、ひそかに家へ戻ってかくれようとする農民軍を探して捕らえ、「責問の上、重罪人を殺し」た。「責問」は拷問であろう。処刑は、毎日、少ない時は12名、多い時は103名にのぼった。死体は、680名になったと記す。悪臭を放ち、人油が氷っていた、という。これまで知られていたように、南大隊長の井上馨公使への報告では、羅州での処刑は、230名と記されていた⁹⁹⁾が、「従軍日誌」では、その三倍で700名にちかかった。南大隊長の公使館への公式報告と「従軍日誌」筆者の記述と食い違いの問題は、今後の課題である。羅州城の南門、当時の「南顧門^{ナムゴムン}」は、現在、羅州の現地に復元されている。この南門近くの処刑場は、かつて羅州鎮営が置かれていた羅州小学校のグラウンドの南手で、地元の研究者たちの近年の聞き取り調査によって、かつての共同墓地跡と推定されている¹⁰⁰⁾。

次は、すこし戻るが、1月31日、長興より西にある海南^{ヘナム}での討伐である。

同三十一日、同所滞在。但し本日、東徒の残者七名を捕え来り、是を城外の畑中に一列に並べ、銃に剣を着け、森田近通一等軍曹の号令にて一齋の動作、之を突き殺せり。見物せし韓人及統営兵等、驚愕最も甚し。

東学農民軍の7名を捕らえてきて、城外の畑の中に一列に並べ、銃剣で、分隊長の号令で一斉に突き殺した。当時、海南城の南部には水田や畑が広がっていた¹⁰¹⁾。その何処かで、朝鮮政

府軍と朝鮮農民の前で、第1中隊の銃剣による東学農民軍7名の整列、号令下の刺殺という処刑が行われた。軍曹は、第1中隊第2小隊第3分隊、兵士18名の分隊長である。第2分隊に居た「従軍日誌」筆者は、これを見ていたのである。こういう抗日農民への残酷な殺戮は、日中戦争以後と言われているが、大きく再検討することが必要であろう。武器は劣るが、地域農民に支持された、地の利を得た数万の農民軍は、徹底的に探し出されて、残酷に処刑された。これも、その後の東アジアの抗日戦争でくり返されたことである。

一方、「従軍日誌」筆者の視線が、「見物せし韓人及統営兵等、驚愕最も甚し」と述べている点に注意したい。筆者は、凄惨をきわめた場面において、朝鮮兵や朝鮮人の「驚愕」に視線を送っている。寛恕や撫育を「懇篤説諭」したとくり返し記す大隊長や、「百発百中、実に愉快」と言う下士官を前に見た。それに較べると、一兵卒の視線は、あくまでも討伐する者の側に居る視線ではあるが、違いがあったと思う。

杉野虎吉は、先述したように、小作人の次男であった。拙著『明治日本の植民地支配』でも述べたように、討伐戦に従軍した兵士たちは、後備兵役に就いていて、常備役7年を経た27歳から32歳の、高年齢の、多くが家族を持ち、そしてこのようにきわめて貧困な農民出身の兵士が多かった。

地方新聞『宇和島新聞』に、「貧困なる従軍者の家族」という見出し記事があった。「目下、東学党征討軍」に居て、妻子、父母をはじめ家族五人があり、「一家は極めて赤貧」、^{こんじやく}蒟蒻製造という零細家内作業をしていた。妻は、一歳の子を背負って蒟蒻製造をつづけるのであった¹⁰⁾。同じ『宇和島新聞』の「憐れむべき従軍者の家族」記事(11月12日)も、後備兵の記事であった¹⁰⁾。

同じ愛媛県では、『海南新聞』にも、同様の記事は多い。後備兵の困窮の深刻な内情を報じた一つは、『海南新聞』8月9日の「子を殺して従軍す」記事である¹⁰⁾。南予の貧しい小作人で、妻に死なれて幼い男子を一人で育てている人物が、後備兵に応召させられる。

「稚児託すべき親族もな」く途方に暮れていると、村の総代の某が、「遅々して咎め受けん事、身の為なるまじなどたしなめ」る。村役人も責任を負わされていた。「気の毒に思へど、益々言葉を励まして声高く、それ従軍は公の事にして子の養育は私の事なり、山より高く、海よりも深き皇恩を知るものは、今日の国難に当り、一私人の事情を放擲して義勇を公に奉ずるの気を奮はざるべからず、思へば御同様に天下泰平国家安穩の幸福を受け、一家其の天命を全ふするを得たるも、皆な天恩の優渥なるによるものを、今日の場合に立ちて、遅々する事、甚だ懼れ多きにはあらずやと諄々として」と、「天恩」を持ち出して説き聞かせたのである。

「某は、殆んど感じ入つて見へたりしが、如何に思ひけん、ツト起ちて奥の間へ退きぬ、ワット一声、叫ぶ稚児の悶絶、こは何事ぞと総代は飛び込みて様子を見るに、早や息の根絶へたる稚児の屍取り片寄せて立ち出づる」、総代に差し向ひ、今は心易し、皇恩の高大なるを聞

きては豚児の如き、顧みるに違あらず、イザ只今より出発せんと、死屍を後園に仮埋めして呆きる、絵代の顔ヂロリと眺め、悠々として松山の方へ出発せりとは、誰噂するとなく、松山あたりに云ひはやす処なり」と報ずる。「実に憫むべきものあり」と結ばれる。

南予の噂と記されており、史実そのものかどうかは確かめられない。しかしこれは、貧しい小作人の「父子家族」の事例であり、真に現実的な事例であった。後備兵の徴兵が、こういうきわめて貧しい農民にとって、どのような結果をもたらすかを示したものである。同じ日の『海南新聞』に、予備役兵であるが、住所、松山市大字久保町 39 番戸、氏名加藤豊太郎を記して、妻を亡くし、3 歳の男子を養う「元来貧困の身」の人力車夫が、子供五人ある日雇稼ぎ人に男子を預けて徴兵に応召する事例を、「子を棄て従軍す」という見出しで報じている¹⁶⁵⁾。後備兵が「子を殺して従軍す」の事例は、現実には起こりえたことであった。

ところで、次のような記事がある。『香川新報』1894 年 12 月 13 日に掲載された「出征者家族救助簡便法」という見出し記事である¹⁶⁶⁾。

記事は、目下「兵士の家族慰問」や「救助など」が、各地でなされているが、多くは従軍者家族の役にたつことが少ない、と述べて、「或る実際の事情に通じたる人の物語り」によるという形で記される。立前ではない、地方の実情を記すのである。

「出征者家族中、現に最も其情の気の毒にして比較上、特に救護を要する種類は後備兵に最も多きか如し」と指摘する。そうして、二つの理由をあげる。第一として、後備兵は、常備兵役を終えて、「家に帰ってより八年以上を経過」しており、そのあいだに妻子をもち、または別家し、あるいは父兄の家を相続して、その家の「最必要者」になっていた。この「最必要者」が「不時の召集」にあったとすれば、「一家の秩序に変動を与えたること」は、予備兵よりも、後備兵にはなはだしいのだ、という。予備兵は、23 歳から 26 歳であるが、後備兵は、27 歳から 32 歳であり、妻子を持つのは、後備兵では、多数であった。そういう後備兵は、「不時の召集」によって家族が大打撃を受けたのである。

『香川新報』論説は、「それのみならず」という。この第二の理由が重要であり、次に記事を掲げよう。

(第二) 今より八九年以前に在りてハ、当今と異なり、兵役を好まざるの風習、一般に存し、富家の子弟、又ハ教育ある子弟等は、何かの事情を設けて服役を免かれ、其服役せるものハ、要するに生計に不自由なる位なればこそ、何等の方便をも講ずるの余地なく、是非なく就役せるか如き実際の有様なりしこと、て、即今後備軍籍に在る輩の家族は惣じて余資に乏しきを見る

右等の事情よりして、実際、比較的の後備軍籍の家族、貧困又は迷惑を感じ居るか故に
……

「今より八九年以前に在りてハ、当今と異なり、兵役を好まさるの風習、一般に存し」と言う。次いで、富家の子弟や教育ある子弟の「服役を免れ」る問題を述べている。「今より八九年以前」は、1886年か1885年に当たる。「今」は、1894年であり、この年に、後備兵として徴兵に該当するのは、27歳から32歳の壮年者で、かつて常備兵として軍籍にあった者たちである。もっとも若年の27歳の後備役該当者は、7年前の1887年に常備兵として徴兵検査を受けて応召し、常備兵役7年（現役3年・予備役4年）に服した者であり、もっとも高年齢の33歳の該当者は、1882年に徴兵に応召した者であった。つまり、1894年に、後備兵として応召した壮年者は、まさに7年以前、つまり1887年から、12年前の1882年に応召していた者たちである。厳密には1年だけ前になるが、「今より八九年以前」が問題なのである。

7年から12年前には、「富家の子弟、又ハ教育ある子弟等は、何かの事情を設けて服役を免かれ、其服役せるものハ、要するに生計に不自由なる位なればこそ」の者たちであると記されている。

知られているように、1883年と1889年の徴兵令改正によって、戸主や、官立学校の生徒の徴兵免除や徴集猶予、また代人料支払による徴兵免除は、なくなった。とりわけ1889年の改正が、徴集猶予を止め、徴兵の合法的な免除の道をなくし、国民皆兵へと近づいたのであった。ところで1894年の後備兵応召者たちは、1882年から87年の徴兵検査を受けていたのであり、1883年の改正の影響を受けている。しかし影響を受けたのだが、戸主の徴集猶予がまだあった。もちろんそれより前、1882年の徴兵は、徴兵令改正の影響をまったく受けていない。したがって1894年の後備兵応召者たちが徴兵検査を受けた際には、実際には「富家の子弟、又ハ教育ある子弟等は、何かの事情を設けて服役を免かれ」ていたのである。結局、服役したのは、「要するに生計に不自由なる位なればこそ、何等の方便をも講ずるの余地なく、是非なく就役せるか如き実際の有様なり」、であった。きわめて貧しい農民が、やむなく徴兵、常備軍に就いたのであった。

そして1889年の改正によって、戸主になった後備兵応召者たちは、今度は、戸主ゆえの免役の道をなくしており、後備兵に応召されたのである。こうして日清戦争で後備兵に応召したのは、要するに実情は、生計に不自由な、戸籍を別に立てたり、移したり、代人料を払ったりできないきわめて貧しい農民たちであった。日清戦争時の後備兵たちは、徴兵令改正のために、徴兵制の重圧をもっともこうむった者たちであった。

『香川新報』の論説では、徴兵制の免役条項の意味の、見逃されがちな一面も、明かされている。徴兵検査では、生計に余裕のない貧農子弟が、貧困のために、「是非なく就役せるか如き実際の有様なりしこと」なのである。「是非なく」なのであり、徴兵は、嫌われ、忌避されたのである。この事実を重く読む必要がある。

日清戦争でも、後備兵応召に対する「戦時忌避」は、実は多かった¹⁰⁷⁾。明治前期の日本軍が

採用した小銃は、スナイドル銃であり、戊辰戦争でも、この欧米から輸入される「恐るべき銃」開発初期ライフル小銃にいち早く着目し多用したのは長州藩など新政府側であった¹⁰⁸⁾。たとえば長州藩は、1868年5月、上野戦争が、横浜外商から買い入れたスナイドル銃のはじめでの実戦であった¹⁰⁹⁾。スナイドル銃の特徴について、本論で紹介した。この小銃を使った戦争は、口径14.9ミリという巨大な口径のライフル銃の故に、きわめて凄惨であった。手足に当たれば、手足が吹き飛び、胴に当たれば、大穴が空き、頭部に当たれば頭部そのものを破碎した。皮膜のない鉛の弾丸と性能の悪い火薬は、鉛毒と火傷を致命傷にいたらせた。1894年の後備兵応召者は、1862年から1867年の生まれに当たる。1862年生まれは、戊辰戦争時、7、8歳であり、西南戦争時、16歳である。これらの戦争は、内戦ではあっても、凄惨をきわめた戦争であったのである。初期の大口径のライフル銃を使ったクリミア戦争や南北戦争の銃撃戦が凄惨をきわめた修羅場の戦場と化したことは近年の戦争史であらためて注目されている¹¹⁰⁾。戊辰戦争や西南戦争も同様であった。凄惨な国内の戦争は、中国から近畿、東海、北陸、関東、東北、北海道まで、まだ30年を過ぎていない人々の経験であって、実体験や語り伝えとして生きていたはずである。明治前期、欧米との国際関係は一応安定しており、隣国、巨大な市場をもつ清国は欧米と依然劣勢に対峙していたのである。日本の国家と人民の存亡を問うような外国から仕掛けられる戦争の危機が目前に迫っていた訳ではなかった。当時の農民の誰が、残酷な戦場へゆくかもしれない徴兵制を抵抗なく受け容れるだろうか。徴兵令を「血税」と見なした人々の戦争への感性は、当時の人々にとっては、当然すぎる、理由があつてのものだったと思う。『香川新報』論説が指摘しているように、事実、富家層は、あらゆる手段を使って、徴兵を免れたのである。

『香川新報』は、「即今、後備軍籍に在る輩の家族は惣じて余資に乏しきを見る」と整理している。後備兵は、総じて貧しき農民たちであった。貧しい農民が、明治前中期の徴兵制を支えていた。貧しき農民たちにとっては、徴兵制は、「地方警察軍的な性格」に過ぎなかったのでは決してなかった。徴兵該当者は、「是非なく」徴兵される、厳然たる徴兵制度に向き合っていた。「是非なく」応召せられる、きわめて貧困な農民の立場にたつて、明治前期の徴兵制を位置づけることが歴史研究者には必要である。まして戦争となれば、貧困な農民にとっては、貧困であるゆえに、後備兵への「不時の応召」は、「一家の秩序」への大打撃であった。日本社会に、徴兵制は、国家権力の威圧をもって現存していたのである。

日清戦争で、朝鮮において、後備兵たちは東学農民軍討伐というもっとも凄惨な戦いの最前線に立たされた。第2次東学農民戦争は、日清戦争のなかで最大の朝鮮農民の犠牲者を出した。朝鮮農民の戦死者は、3万名を越えるのは確実で、5万名に迫ると推計されている¹¹¹⁾。14.9ミリの大口徑ライフルのスナイドル銃と、徴兵制で訓練された日本兵士は、本論で紹介したように、東学農民軍に対して凄惨な、苛酷な討伐を展開した。下士官たちは、東学農民軍を前世紀

の粗末な武器をもつ未開の弱兵、「暴民」と呼んだ。「百発百中、実に愉快」と言い切っていた。「愉快」という言葉に胸を突かれる。だがそれは、戦場における下士官の一面である。

朝鮮兵站線守備隊で、東学農民軍討伐の最前線に常に居た二人の指揮官が、帰国を前に、朝鮮で自殺したことを、拙著『明治日本の植民地支配』で紹介した¹¹²⁾。一人は、可興の司令官、後備第10聯隊第1大隊第1中隊の大尉、前にたびたび登場した福富孝元である。釜山の後備第10聯隊の陣営で、日清戦争後、1895年4月28日午後、軍刀をもって頸動脈二ヶ所を切り、自決した。発見後、一時、5月2日「精神元に復し」たが、同月13日亡くなった。高知市出身であり、つねに東学農民軍討伐の最前線にいた人物である¹¹³⁾。

もう一人は、釜山の小隊長、後備第10聯隊第1大隊第3中隊中尉、遠田喜代で、朝鮮南海岸の凄惨な討伐戦の指揮官であった。帰国を前に、1895年10月2日、地理実査に出て行方不明になり、捜索の末、6日深夜、蔚山^{ウルサン}街道で自害しているのが発見された。松山市出身。妻と2人の子供がいた¹¹⁴⁾。

大本営の「ことごとく殺戮命令」は、不法な一方的な、虐殺に等しい闘いをさせた。後備兵士たちの戦場体験が兵士たち自身や日本社会にもたらしたものを見えないだろうか。当時の軍の公式記録にも、次のような事実が記されている。

後備第10聯隊第1大隊、兵站線守備隊の「陣中日誌」の次の記事は、1894年10月19日である¹¹⁵⁾。

第四中隊より逃亡兵護送として広島に派遣せり。

第4中隊における、逃亡兵、広島へ護送の記事である。1894年9月下旬から10月下旬にかけて、第4中隊は、鈴木安民大尉、中隊長の指揮下、慶尚道^{テグ}大邱^{アンドン}、安東^{テボン}、台封など慶尚道一帯の東学農民軍討伐のもっとも中心的役割を果たしていた。鈴木大尉は、この「陣中日誌」に数多くの討伐報告書を残している。その第4中隊から、討伐作戦中に逃亡兵が出ているのである。兵士の階級や氏名は不明である。

同じ後備第10聯隊第1大隊第2中隊では、1894年秋、慶尚北道海平^{ヘピョン}の兵站部司令官、香川少佐は、現場で「発狂」している。二つの記事がある¹¹⁶⁾。

(9月11日)

本日、洛東今橋少佐より、海平司令官、香川少佐、発狂の気味ある旨、電報あり

(9月12日)

海平兵站司令官、香川少佐、愈発狂に確定せるを以て、洛東司令官今橋少佐に命し、釜山へ還送の取計を為さしめ、又副官田中中尉に司令官代理を命す

このころ、東学農民軍の日本軍への電信線切断や蜂起は慶尚道の各地で起きており、9月24日、多富司令官渡辺少佐から次の様な命令を出したと電報が届いた。「電線切断する事二回、東学党の所行たる事明かなり、守備兵を昼夜巡回せしめ、又は窃に伏兵を置き、怪しき者は打殺し、地方官より地方官へ告示させよ。誤りにてもかまはず、つまり半殺にして置く勿れ、特に夜間を注意せよ。○此事を海平、洛東へも直くに通せよ」¹¹⁷⁾。香川少佐が居た海平兵站司令部跡は、今、かつて日本軍が使っていた富農の民家が、往時のまま残されており、当時の富農の子孫が暮らしている。昨年、4月、韓国の申榮祐氏ら研究者たちとともにその民家で子孫に会うことができた。民家は、第2次東学農民戦争の史跡として保存の手段がとられていた。

1894年9月30日には、釜山の第5師団中路兵站監本部は、洛東司令官へ次のような電報を發した。「夜中巡回を密にし、怪しきものは、誰彼れの別なく、殺戮せよ」。洛東司令官への命令であるが、事実上の「ことごとく殺戮命令」である¹¹⁸⁾。こうした命令が出された直後にあたる10月2日、利川の田中中尉から「井上軍曹、誤て自殺の時」と報じ、これを守備隊（第1中隊）中隊長福富大尉へ報告した、と電報がとどく¹¹⁹⁾。東学農民軍が強力であった利川兵站部で、軍曹が自殺していたのである。上に見たように、この報告を受け取った福富大尉も日清戦争後、釜山の陣営で自殺した。

日本軍兵站線守備隊であった後備第10聯隊第1大隊は、今分かっているところで整理すると、第1中隊では、利川兵站部の軍曹が自殺し（1894年10月2日）、第1中隊長もその後、釜山で自殺する（1895年4月28日）。第2中隊では、海平兵站部司令官の少佐が発狂して送還された（1894年9月11日）。第3中隊は、中尉が蔚山で自殺し（1895年10月）、第4中隊で一人の逃亡兵を出していた（1894年10月）。

上の後備第10聯隊第1大隊は、釜山から慶尚道を北上し、小白山脈を越え、忠清道を経て、京畿道をソウルへと入る兵站線守備隊であった。日清戦争の間、蜂起した東学農民軍と戦いつづけていた。その一大隊の指揮官を中心として、自殺が3名、発狂が1名、逃亡兵が1名出ている。これは公式記録に残された範囲で分かったことにすぎない。多数出た戦病死も、病名など明らかでないのだが、こうした死者が居た可能性がある。凄惨をきわめた戦場であったのである。現代の隔絶した軍事力を持つ超大国の、ベトナム戦争などゲリラ殲滅戦の最前線に立った下士官や兵士たちの戦争神経症に類似していると思う。

1894年9月5日、この後備第10聯隊第1大隊長に就いたのは、今橋知勝少佐であった。10月釜山兵站司令官となり、兵站線守備隊の指揮を執り、1895年1月、南部兵站司令官となって朝鮮守備隊全体の指揮官に任じ、中佐となる。同年5月台湾へ上陸、8月に台湾兵站参謀長に就き、1896年7月から8月にかけて、「台湾中部土匪討伐」（雲林第2次討伐戦）に従軍した。今橋中佐指揮下の台湾守備歩兵第3連隊は、「匪徒を根底より剿滅すべきを命じ」られており、死傷者150余名をだして雲林を奪還したものの、炎天下の山中討伐戦は掃討中止となった¹²⁰⁾。

日露戦争では、第2軍兵站監(少将)に任じ、1917年、後備役退役、64歳であった。討伐戦争は、朝鮮から台湾へ連鎖していた¹²⁾。

注

- 1) 拙著『明治日本の植民地支配——北海道から朝鮮へ——』2013年、岩波現代全書、第4章第3節。中塚明・井上勝生・朴孟洙『東学農民戦争と日本』高文研、2013、Ⅲの6「一日本軍兵士の「陣中日誌」から」。
- 2) 「陣中日誌」は、戦時にならず記され、参謀本部に提出、抄録版を同本部の「陸軍文庫」に保管する規則であった。「陣中日誌例式」(「第五師団中路兵站監本部 陣中日誌」冒頭など)。
- 3) 『駐韓日本公使館記録 6』『東学党征討略記』1895年5月、国史編纂委員会、1991、282~306頁。
- 4) 2008年、南家から山口県文書館に寄贈、同館、諸家文書の南家文書。
- 5) 註2)参照、目的乙は、「戦時、戦間編成、教育、補充、給養、兵器、材料、被服、装具等、凡そ軍事に関する事物、経験を録し、後來其各事物を漸次改良せしむべき材料とす」。
- 6) 柳瀬一秀論文『愛媛近代史研究』69号、2015年10月。
- 7) 一昨昨年(2015年)10月に、玄明詰氏と行ったソウル現地調査。
- 8) 大林寺『法然上人八百年御遠忌記念大林寺開山四百年記念誌』(浄土宗月照寺崇源院大林寺、2010年)に、近世・近代の地図や敷地図が掲載。34~36頁。同寺住職から提供。
- 9) 「南部兵站監部 陣中日誌」1894年10月27日条の「十三」。朴宗根『日清戦争と朝鮮』青木書店、1982年、193~194頁。以下引用史料は、原文のカタカナはひらがなに直し、一部漢字をひらがなに直し、カッコで筆者の注記を加えた。原注にはその旨を記した。
- 10) 前掲拙著、100~102頁。また拙稿「東学農民軍包圍殲滅作戦と日本政府・大本営——日清戦争から「韓国併合」100年を問う——」『思想』(「韓国併合100年を問う」1029号、2010年1月号)。
- 11) 「南部兵站監部 陣中日誌」10月28日条「八」午後7時10分、洛東との往返電報。
- 12) 同日誌、同日条の「二」午前10時、洛東との往返電報。
- 13) 『駐韓日本公使館記録 1』『東学党鎮圧の爲め派遣隊長に与ふる訓令』444・445頁。
- 14) 逆に日本外交部が、朝鮮政府の外交部に、討伐援兵要請を出させるようにしたことについて、拙稿註10)論文「東学農民軍包圍殲滅作戦と日本政府・大本営」2010年。姜孝叔論文「第二次東学農民戦争と日清戦争」『歴史学研究』762号、2002年。
- 15) 参謀本部編纂『明治二十七八年日清戦史1』66頁。日本軍が村田銃以前、スナイドル銃を「全般に採用」していたことも同頁。
- 16) 「南部兵站監部 陣中日誌」11月30日の記事「三」。
- 17) 陸軍省「明治二十七八年戦役日誌」には、参謀総長「村田銃と交換協議」書簡(10月20日)、児玉次官「村田銃六百四十九挺大坂より送る」命令(10月21日)など掲載。『明治二十七八年日清戦史』に、後備歩兵第十八大隊にスナイドル銃を村田単発銃に交換したことが記される(第7巻、78頁)。

なお、この10月20日、参謀総長書簡には、後備第18大隊の任務について、つぎのように大

本営で内定したと述べている。「後備歩兵第十八大隊（三中隊編成）を京城に派遣し、該大隊長をして公使館及在京城領事館及居留民保護に任し、且つ兵力を以て公使の対韓事業を援くるの任務を負わしむることと内定相成候、然るに京城は諸外国人の輻輳地にも有之、且つ該大隊は幾分か韓兵に対し常に模範たるべき意味も有之候に付」と。公使は、井上馨である。「兵力を以て公使の対韓事業を援く」るためにも日本軍のソウル守備後備大隊は、村田銃 649 挺をもたせるとされた。軍事と外交の協力関係の展開に関わるものである。この参謀総長書簡は、「朝密第六〇五号」・「臨發第八六八号」と記入され、大本営用野紙に記されている。「戦役日誌」出納記号、「陸軍省・日清戦役・M27-5」。

- 18) 『明治二十七八年日清戦史 1』 65・66 頁。
- 19) 陸軍士官学校編『二十六年改訂 兵器学教程』陸軍士官学校, 1893 年。
- 20) 同上。なお徳島市立德島城博物館で 2011 年開かれた企画展示「阿波の鉄砲 —— 鉄砲からみた阿波史 ——」（解説坂本憲一「阿波の火縄銃」）では、ミニエー銃、口径 14 ミリ。スナイドル銃、口径 15 ミリ。スペンサー銃、口径 13 ミリ。火縄銃（小銃型火縄銃）、口径 12~18 ミリ。ゲベール銃、口径 17~20 ミリなどが展示された。徳島藩は 1862 年藩主蜂須賀斉裕が陸海軍総裁についたこともあり、洋式銃を早くからとりいれ、洋式銃が県内に残存しているという（企画展示、冊子 2011）。初期ライフル銃は、命中率がきわめて悪かった火縄銃やゲベール銃の大口徑に近い口径で造られていた。
- 21) 註 19『二十六年改訂 兵器学教程』。なお、火縄銃やゲベール銃の球形弾丸は、円錐型のライフル銃弾丸とちがって、弾重は軽く、直進もしない。命中しても骨を粉碎することはなかった。
- 22) 『海南新聞』1895 年 1 月 20 日 2 面、軍曹の郷里宇和島への書簡。
- 23) 陸軍士官学校編『二十三年改訂 兵器学教程』陸軍士官学校, 1893 年。口径は、フランス Gras 銃 11 ミリ、プロシア Mauser 銃 11 ミリ、イギリス Henry-Martini 銃 11.43 ミリ、オーストリア Werndl 銃 10.70 ミリ、イタリア Vetterli 10.70 ミリ、ロシア Berdam 銃 10.70 ミリで、欧州各国の銃は、「大同小異なり、故に各国銃器の威力は、等齊なるべし、」とし、優劣は「銃器用法の如何と兵卒教育の良否なりとす」と記す（46~47 丁）。
- 24) 『徳島日日新聞』1895 年 1 月 9 日 2 面。
- 25) 『駐韓日本公使館記録 1』 519・520 頁。
- 26) 崔時亨の起包に触れた論文は多数ある。最近の研究では、申榮祐「北接農民軍の公州・牛禁峙・連山・院坪・泰仁戦闘」『韓国史研究』154 号, 2011 年。青山での起包の前提となる崔時亨の活動については、朴孟洙氏の崔時亨についての最近の研究が詳しい。『近代日本と韓国との関係』北海道大学提出・博士論文 2000 年、『開闢の夢、東アジアを起こす —— 東学農民革命と帝国日本 ——』モシヌンサラム社, 2011 年。注 50) に掲げた『忠清北道東学農民革命研究』に文岩邑の現地調査が報告され、崔時亨の滞在した農家が、日清戦争時焼亡したという地元の証言などが記述されている。（290-292 頁）。
- 27) 『宇和島新聞』1895 年 2 月 7 日 3 面、「朝鮮私信」。「朝鮮私信」は、1895 年 2 月 2 日 3 面（1 回）、2 月 3 日 3 面（2 回）、2 月 7 日 3 面（3 回）連載。
- 28) 『駐韓日本公使館記録 1』 478 頁。
- 29) 『駐韓日本公使館記録 1』 444 頁。
- 30) 「南部兵站監部 陣中日誌」11 月 27 日の「二」。
- 31) 『駐韓日本公使館記録 3』井上公使 11 月 26 日電報, 664 頁。
- 32) 「東学党ノ状況」, 「戦史編纂準備書類 第五十八 (58) 東学党ノ状況」防衛研究所図書館所蔵。

- 33) 「韓国東学党蜂起一件」明治26年4月～28年9月, 外交史料館所蔵。この史料は, 東学農民戦争百周年紀年事業推進委員会編『東学農民戦争史料叢書』20・21巻, 1996年, 史芸研究所(韓国)で写真版が刊行。
- 34) これら「陣中日誌」は, 防衛省防衛研究所に目録もある。
- 35) 「明治二十七年十二月 二七・一二・一～二八・八・二〇 陣中日誌 南部兵站監督部」は, 防衛研究所図書館所蔵。表紙には, 左上に「新戦史編纂材料」と朱印。本文罫紙は, 11行の黒白両面印刷で, 南部兵站部の他の「陣中日誌」罫紙の片面印刷と異なる。表紙の「二七・一二・一～二八・八・二〇」という鉛筆書きは, 他の南部兵站部「陣中日誌」表紙にも同様の形で記されている。もともと整理の際などの後年の書き込みであろう。
- 36) 「東学党征討略記」は注3)。
- 37) 後備第9大隊が, 3路に分かれて東学農民軍に対して包囲殲滅作戦を行ったことについては, 朴宗根『日清戦争と朝鮮』青木書店, 1982年, 北海道大学文学部・古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会『古河講堂「旧標本庫」人骨問題報告書』「東学党農民軍指導者と推定される頭骨について」(井上勝生執筆)1997年, 北海道大学文学部, 趙景達『異端の民衆反乱——東学と甲午農民戦争』岩波書店, 1998年, 姜孝叔「第2次東学農民戦争と日清戦争」『歴史学研究』762, 2002年, 拙著『明治日本の植民地支配——北海道から朝鮮へ——』など。
- 38) 「従軍日誌」1894年11月16日に, 第2小隊第1分隊は, 小松軍曹小隊長で, 兵卒15名と記される。第3分隊人数は11月18日と1895年1月21日に, 18名と記される。
- 39) 「南部兵站監督部 陣中日誌」10月28日条の「九」, 午後8時50分, 南部兵站監督より井上馨公使への電報。次に指摘した日本公使館宛の報告は, 同日誌10月28日「九」午後8時, 京城井上公使宛電報。大本営宛の報告は, 同日誌10月29日「三」午後6時, 川上兵站総監への電報。
- 40) 同, 陣中日誌, 11月1日条の「一」, 利川田中大尉よりの電報。
- 41) 申榮祐「北接農民軍の公州 牛禁峙・連山・院坪・泰仁戦闘」『韓国史研究』154, 2011。
- 42) 東学と東学農民戦争について, 韓国の研究者の一般向け概説書として, シンスン Chol・イジンヨン『実録東学農民革命』(西景文化社, 1998年), 李離和『李離和 韓国史物語¹⁸ 民衆の喊声 東学農民戦争』(ハンギル社, 2003年)など。
- 43) 利川市立博物館は, 利川市^{キョンチュン}京 忠^{ダロ}大路2697号路172(官庫洞^{クワンゴドン}418-3)。
- 44) 観光案内書の一例。「名陶の里 イチョン」は, つぎのように説明される。「イチョンは古くから陶芸の町として知られていたが, 朝鮮王朝末, 官窯の閉鎖によって脈が絶たれた。韓国建国後, 陶芸の町を再び生き返らせようと陶芸家が集まって伝統陶芸復活に情熱をかけた。その努力の甲斐あって今の町がある」(『地球の歩き方 ソウル2014-2015年版』ダイヤモンド社, 2014年改訂版)340頁, 利川陶芸村(沙音洞)陶器制作体験教室など窯数ヶ所の紹介がある。『新個人旅行 韓国 '08-'09』昭文社の「韓国随一の焼き物の里を訪ねる利川」, 190頁も同様の記述。利川陶器窯「閉鎖」は, 本文の通り, 日本軍に壊滅させられたためであった。
- 45) インス『利川の義兵抗戦と独立運動』(利川文化院, 2009年)234頁, 「利川の義兵と独立運動家」。同書は, 京畿道前期義兵運動と利川の闘争を詳述。利川前期義兵について, 柳漢喆「金河洛 義陣 義兵活動」『韓国独立運動史研究 第3集』(1989年)の詳しい研究などが紹介され, 柳論文から「利川首倡義所 蜂起図」が掲げられている。利川市立博物館でも, この蜂起図が展示。
- 46) 「後備歩兵第十聯隊第一大隊 陣中日誌」11月5日, 可興福富大尉の報告に「彼を追撃し, 牧溪村に入らんとするに渡船皆彼岸に在り, 河深ふして渡渉すへからず」などと記される。防衛研

東学農民戦争、抗日蜂起と殲滅作戦の史実を探究して（井上）

究所図書館所蔵、千代田文庫の「明治二十七八年役 第五師団陣中日誌 卷十五」1085頁。

- 47) 「後備歩兵第十聯隊 陣中日誌」12月13日記事, 同上, 1003頁。
- 48) 拙著『明治日本の植民地支配』135頁など。同頁で、「東学農民軍は、有力な日本軍と出会うと潜伏し、日本軍が去ると立ち上がる。そこで進軍すると農民軍はいない。際限がなく、日本軍は奔命に疲れていた。このように討滅作戦がはじまってから一ヵ月後、最大の公州戦争を経ても、実は状況は変わっていないかった」と指摘した。同頁に、南部兵站監部司令官の訓令から「(東学農民軍は) やや有力な軍隊(日本軍)に遭遇する時は、潜伏してその所在を隠し、軍隊がその地を去れば、また興る。ところがその興るや、その名在て、その実なし。討伐の事、よろしくその実を探り、その実に当らなければならぬ。これ深く銘心すべき事である」という部分などを掲げた。末尾の「よろしくその実(潜伏した農民軍)を探り」の部分で、日本軍の討伐が、東学農民軍を、探し出して処刑する凄惨な討伐へと進展することを説明した。
- 49) 「後備歩兵第十聯隊第一大隊 陣中日誌」11月5日条(千代田文庫の「明治二十七八年役 第五師団陣中日誌 卷十五」1085・1086頁)。
- 50) この日本軍の可興兵站部跡の現地は、朴孟洙氏、^{キムヤンシク}金洋植氏に案内していただいた。史跡の標示などは設置されていない。可興兵站部の詳しい調査と現況説明は、忠清北道『2006.12 忠清北道東学農民革命研究』「V. 忠北地域 東学農民革命 遺跡地 現況と保存の実態」。調査代表者は^{ベハンフ}金洋植。申榮祐、朴孟洙、^{ハンソン}裴元燮ら専門研究者が参加した。日本軍可興兵站部のあった場所も同書に記されている。放置されている碑などは、史跡として保存することが課題であると記されている。同書は、参考文献も網羅された380頁の調査報告書である。
- 51) 拙著『明治日本の植民地支配』97～99頁「北接東学農民軍の一斉武力蜂起」の節。
- 52) 一昨年4月、申榮祐氏にシンポジウムでお会いし、可興・東幕里の接主、李敬原(同音異字の可能性ある)子孫探索の調査が、地元ではじめられたと教えられた。
- 53) 「南部兵站監部陣中日誌」10月9日の「十一」午後7時30分、南部兵站監より川上兵站総監への電報。
- 54) 朝鮮総督府陸地測量部、五万分の一地形図「堤川」1915年測図、1921年発行。この地形図は、日本支配の負の遺産である。歴史研究の資料として用いた。
- 55) 「南部兵站監部 陣中日誌」1894年10月16日条「九」、午後10時25分可興福富大尉よりの電報。
- 56) 同上、陣中日誌、10月17日条「七」午後8時50分、川上兵站総監への電報。
- 57) 同上、陣中日誌、10月18日条「一」午後8時50分、公使館杉村書記官への返電。
- 58) 「韓国東学党蜂起一件」電受第521、10月19日午後4時55分発、^{ハンソン}漢城杉村代理公使より陸奥外務大臣宛。
- 59) 同上、電送第416、10月20日午前7時発、陸奥外務大臣より広島鍋島外務書記官宛電報。
- 60) 注2)「陣中日誌例式」「第五師団中路兵站監本部 陣中日誌」冒頭。
- 61) 「韓国東学党蜂起一件」明治27年10月1日、室田総領事、機密第69号の別紙甲号、忠州兵站司令官福富孝元「特別報告、明治27年9月24日午後於忠州兵站司令部」の「執綱望(我国ニ於テ首領或ハ棟梁ト云フ如シ——原注)」。忠清道東学農民軍指導者一覧、韓国政府の宣撫使は、指導者逮捕を命令された福富の命令実行を防ごうとして、自分が北接東学農民軍指導部を説諭するとこれを渡したのである。この名簿は、『駐韓日本公使館記録 1』477・478頁にも、「東学党巨魁人名簿の一」として掲載。成斗漢は、23人目に「丹陽 成斗漢」と載る。
- 62) 「南部兵站監部 陣中日誌」12月11日条の「一」午前2時10分仁川太田大尉からの電報。

- 63) 「東京朝日新聞」1985年5月7日「東学党巨魁の裁判」「裁判を宣告せり、全録斗、成斗漢、崔敬先、孫化忠、金得明の五巨魁皆死刑に処せられ、直に執行せられ」。この「東京朝日新聞」記事は、韓国の東学農民戦争史料叢書編纂委員会『東学農民戦争史料叢書 22』（史芸研究所、1996年）381～385頁に複写版で収録。注50の文献『忠清北道東学農民革命研究』に、成斗漢は北接大接主、1894年に47才と記される。同書、206頁。
- 64) 「南部兵站監部 陣中日誌」10月24日条の「一」午前6時、洛東兵站部からの電報。
- 65) 『岩波日本史事典』1999年、1766頁。
- 66) この墓の情報は、韓国の申榮祐氏が軍人墓地についての日本のホームページで見出された。高知大学小幡尚氏が地図で墓の位置を探索され、2015年11月29日、小幡氏の案内で現地調査。愛媛大学の中川未来氏にも現地調査で協力いただいた。
- 67) 『駐韓公使館記録 6』『東学党征討略記』の別紙「東学党征討策戦実施報告」の「九」別紙、宿泊表309～315頁。
- 68) 『駐韓日本公使館記録 3』『南少佐へ韓銭送金の件』743頁。
- 69) 申榮祐論文「北接農民軍の公州 牛禁時・連山・院坪・泰仁戦闘」（『韓国史研究』154、2011年）、「東学農民戦争期 報恩一帯とブクシル戦闘」（1993年）、後者は、忠北大学校・報恩郡『研究叢書第6冊 報恩 鐘谷 東学遺跡 —— ブクシル戦闘および関連遺跡と集団埋葬地調査——』に収録。この論文の改訂版が前者。集団埋葬地調査は、ブクシル戦闘で東学農民軍の犠牲者が谷間に集団で埋葬された史実を文献と古老たちから聞き取り、発掘調査によって見出した報告。東学農民戦争100周年記念事業以前の北接東学農民戦争研究の記念碑的報告書。忠清北道などによって北接東学農民軍のブクシル戦闘を記念する公園が造成された。報告書は朴孟洙氏から提供。
- 70) 「東学党征討経歴書」と題名が朱書され、別に「経歴書」とも記されている（山口県文書館、諸家文書の南家文書）。南小四郎少佐が南部兵站監部に提出。罫紙に手書きされ、添削もされている。提出した本紙の控えと思われる。
- 71) 「東学党鎮圧ノ為メ派遣隊長ニ与フル訓令」第二項但し書き『駐韓日本公使館記録 1』444頁。
- 72) 申榮祐論文「1894年東学農民軍の清州城占拠の試図」『忠北史学』13、2002年。
- 73) 仁川兵站監の訓令に付載『駐韓日本公使館記録 1』445・6頁。
- 74) 地図4、記入した「周安」は、原図には記されていない。参謀本部1893年製版「朝鮮全図南部」20万分の一の「公州」の周安の位置から推定して記入。記入した地名は、原則として現在の地形図を用いた。総督府陸地測量部地図は、宛字、誤字、または改変と思われるものが少なくない。
現在のダム湖、西岸は、三政洞、城峙山、稷洞、函角山、犬頭山、秋洞、古鳳山、新上里で、東岸は、後谷里、佳湖里、苦海山、沙城里、新村里白骨山の中腹、または村境。
- 75) 拙著『明治日本の植民地支配 —— 北海道から朝鮮へ ——』211～213頁。
- 76) 『阿波戦時記 上巻』明治28年、徳島県、69頁。
- 77) この杉野虎吉忠魂碑の調査では、徳島県文書館徳野隆氏、阿波市の郷土史家坂本憲一氏の助力をいただいた。
- 78) 注70) 参照。
- 79) 『宇和島新聞』12月25日掲載。
- 80) 申榮祐氏論文注64) 参照。
- 81) 以下、南大隊長「文義付近戦闘詳報」『駐韓日本公使館記録 1』489・90頁。「東学党征討略

記]、「東学党征討経歴書」などに拠る。

- 82) 「文義付近戦闘詳報」『駐韓日本公使館記録 1』490 頁など。
 - 83) 「増若付近戦闘詳報」『駐韓日本公使館記録 1』492 頁。
 - 84) 申榮祐論文「1894 年東学農民軍の清州城占拠の試図」62～63 頁など。史料は、韓国側史料「巡撫先鋒陣騰録」などと、主には『駐韓日本公使館記録』など日本軍側史料の丹念な分析、現地踏査である。はじめの 2 で述べた、当時の日本公使館と軍による東学農民軍側史料の「分捕り」がもたらした歴史学上の欠落はあまりに大きい。これは、あらためて記しておきたい。
 - 85) 「東学党征討略記」『駐韓日本公使館記録 6』283・284 頁。
 - 86) 「韓国東学党蜂起一件」など、注 61) 参照。
 - 87) 「増若付近戦闘詳報」『駐韓日本公使館記録 1』492 頁。
 - 88) 拙著『明治日本の植民地支配 —— 北海道から朝鮮へ ——』123 頁。
 - 89) 『駐韓日本公使館記録 1』「文義付近戦闘詳報」489～490 頁、「増若付近戦闘詳報」492 頁。
 - 90) 『駐韓日本公使館記録 6』284 頁。
 - 91) 「東学党征討経歴書」11 月 27 日から 30 日の「石黒、水原両支隊と合す」まで、省略をせずに記した。カッコ内の原注は、その旨記した。
 - 92) 「周安」は、1915 年測図陸地測量部・五万分の一地図「需城」(現在の地形図「大田」に該当)にも、現在の地形図五万分の一「大田」にも出ていない。参謀本部は、1893 年に地形図二〇万分の一を測量、印刷を終えていた。これを貼り合わせた巨大な見事に彩色された「朝鮮全図」南北 2 枚も完成させていた。拙著『明治日本の植民地支配 —— 北海道から朝鮮へ ——』111 頁で、防衛研究所図書館千代田文庫（宮内省史料）の中に見出したことを紹介した。中塚明、朴孟洙両氏との共著『東学農民戦争と日本』76 頁に南部のタイトル部分写真を掲載した（76 頁）。千代田文庫の史料カードでは「朝鮮全図」（千代田文庫、整理（カード）番号 1187）とだけ記されている。地図の大きさは、貼り合わせて変形の四角形になっており、最大幅で、「朝鮮全図・南部」が縦 319.5 センチ、横 337.5 センチで、「朝鮮全図・北部」は、縦 314 センチ、横 318 センチである。この「朝鮮全図」は、変形四角形のため、吊すことはできない。大形の机上に開展して使ったのであろう。千代田文庫は宮内省のものであり、日清戦争時、大本営でもこの彩色図、または同様な巨大地図が使用された可能性が高い。
- 貼り合わせてない、彩色もされていない朝鮮北部 36 枚、南部 32 枚の地形図も千代田文庫にある。地形図は、道路を中心に河、田畑、街、山岳（等高線）を作成していた。これは、小林茂・渡辺理絵・山近久美子「初期外国測量の展開と日清戦争」（『史林』93 巻 4 号、2010）で指摘されている。地形図のうち、「公州」は、中央部に清州、文義、^{チミョンル}至明楼、懷徳、増若、沃川などを記載している。地名多数に誤りや同音異字などが多い。文義から増若、沃川へ南下する道は、^{トゴク}至明楼、^{ヤングリョン}道谷、^{ソンナムサン}両屈岨、^{ソンサンドン}石南山、^{バンチョドン}城山洞、^{サム}方秋洞のすぐ左に「周安」があり、下は、陽知村、^{マダルコグ}三街、馬達峙、増若とつづく。
- この二〇万分の一地形図が、領事館付き武官などの秘密測量によって密かに測量、作成されたことは、前掲の小林茂・渡辺理絵・山近久美子論文 21～24 頁で説明されている。日清戦争の前年に参謀本部は朝鮮全土の北の端まで二十万分の一測量を完成させ、製版していたのである。同論文は、この二十万分の一地形図について、「その戦闘における意義は小さかったとみてよい」としている（30 頁）。「戦闘」を局地戦闘だけに限定してみればその通りであろう。しかし一方で、道路や山（等高線）、河、沢、街、田畑などが秘密測量のため十分ではなかったが、近代的測量技術も使って作成されていた意義は、日本軍にとってきわめて大きかったと見るべきである。

たとえば参謀本部編纂『明治二十七八年日清戦史』第1巻の付図(折り込み)「第2」混成旅団の南進作戦地一覽図は、縦78センチ、横51センチの大きな地図であるが、この「1893年参謀本部測量部二〇万分の一地形図」の「漢城府」,「広州府」,そのものなのである。左上、枠外には、「此地図は、戦争当時、我軍の専ら使用せし地図より採りたるものなり」と記されている。参謀本部が、戦争当時、日本軍が「専ら使用した」と説明しているのである。現地部隊にこの地形図が与えられた具体的証拠は、小林茂他の論文にも示されている(同論文30頁)。日本の政府と軍が、事前に周到な準備をしていた重要な事例であろう。

2「分捕られた東学農民軍文書」で説明した日本軍に襲撃された「崔時亨隠れ家」,忠清北道「文岩」を原図にないが、∴印で記入した。前掲『忠清北道東学農民革命史研究』290~292頁などを参考にした。

- 93) 第3中隊は、錦山から珍山へと山岳部の悪路に入り込んで軍馬多数を失った。また連山戦闘では、東学農民軍は、周到に準備された抗戦をおこなった。連山戦闘と、日本と韓国での連山戦争関連戦争遺跡の掘り起こしについて拙著『明治日本の植民地支配 —— 北海道から朝鮮へ ——』121~130頁, 211~217頁。
- 94) 墓の碑文には、「任開城府守備隊長、七月二十四日、以病没」と記される。
- 95) 「東学党征討略記」『駐韓日本公使館記録6』298~9頁。
- 96) 同上。
- 97) 朴孟洙氏と谷城を訪ねたが、討伐に関する現地での資料を知ることができなかった。
- 98) 「従軍日誌」1895年1月9日。「従軍日誌」長興戦争での第2小隊第2分隊の戦闘が詳しく記されている。この現地調査は、今後の課題である。
- 99) 『駐韓日本公使館報告 6』「東学党征討策戦実施報告」1895年2月10日, 309頁。
- 100) 一昨年(2016年)10月、羅州市の地域研究者から教えられた。共同墓地の場所は、ビール工場、肥料工場になるなど変遷をたどり、1970年代に、遺骨ごと掘り返された。今は、遺骨の行方も分からないという。現地には、朴孟洙氏、原田敬一氏、趙景達氏、姜孝叔氏らが参加。今後調査をする必要がある。
- 101) 1917年測量1918年製版陸地測量部五万分の一地形図「海南」。
- 102) 『宇和島新聞』1895年1月20日、宇和島市笹町の平民谷口文蔵一家である。
- 103) 同上11月12日。
- 104) 『海南新聞』1895年8月9日3面「子を殺して従軍す」。
- 105) 同上、同じ3面の一段下に掲載。
- 106) 『香川新報』1894年12月13日1面。
- 107) 本論では、触れないが、後備兵の「戦時不応」,戦時下徴兵忌避は、新聞などにほとんど載らない。これを多く掲載しているのは愛知県の地方紙『新愛知』である。1894年9月から10月にかけて、「戦時不応」,「召集に応ぜず」,「不応しての入監」など戦時下徴兵忌避、つまり投獄を報道している。17名が氏名、地名入りで報道され、27歳以上は、13名である(1名、年齢不明)。ソウルより北の黄海道などでも、東学農民戦争は全羅道などに劣らず激化した。この討伐戦は、第3師団所属の後備第6聯隊(陣営、龍山)があたり、兵士たちは、東海・北陸地方から応召した。東海地方では、岐阜県の兵士が多く、『岐阜日日新聞』は、東学農民戦争、海州^{ヘジュ}戦闘で岐阜県の戦死者一人(下石津郡札野村)を報じている。この調査で、戦時不応記事にであった。なお、黄海道東学農民戦争、また本論の朝鮮中南部の東学農民戦争、後半は、今後の課題である。
- 108) スナイドル銃の導入は、拙著『開国と幕末維新 日本の歴史⑱』講談社、2002年、323・324

頁。『幕末・維新 シリーズ日本近現代史①』岩波新書、2006年、135～137。同書で指摘した、高杉晋作の「回復私議」の文言、「諸隊の壮士に、ミネールの元込み（スナイドル銃）、雷フルカノンの野戦砲（アームストロング砲）を持たしむるときは、天下に敵なし」（一坂太郎編・田村哲夫校訂『高杉晋作史料第二巻』マツノ書店2002年、395頁）は、「天下」の意味などを考えさせられる。また欧米の大陸戦争が開発した「恐るべき銃」、スナイドル銃など開発初期ライフル銃への軍制改革の提起として重要である。幕末・維新史の重要な論点の一つであろう。この軍制改革や徴兵制は、本論で述べた第2次東学農民戦争を見ても、日本と東アジアの近代史に大きな影響をおよぼす起点となっているのである。韓国の井邑市や長興市の東学農民戦争（韓国では東学農民革命）記念館で、スナイドル銃の忠実な複製が展示されている。

- 109) 『防長回天史第6編上』第8章「関東各地及ヒ関東ノ形勢」。つぎのように記されている。「根津より団子坂に向ふ、纔に街端に出るや、（長州兵—井上注）先頭の第一大隊四番中隊（中略）俄かに敵兵の射撃に遭ふ、因て直に之に应せんとしたるも未だ其新たに支給せられたる「スナイデル」銃の操法に慣れず、為めに混雑を生ず」（原文はカタカナ文）。このスナイドル銃は、参謀木梨精一郎の斡旋で「横浜の外商」より購入したもので、長州兵は、加賀藩邸にいったん退いて操法を伝習してから前進したという。スナイドル銃について「当時に在りては最も精鋭の兵器たり」と注記している。同書203-204頁。『防長回天史』大正10年修訂再版、2009年マツノ書店復刻版による。長州藩は、スナイドル銃の前は、よく知られているように長崎でミニエー銃を輸入、使用した。
- 110) たとえばオーランド・ファイジズ、染谷徹訳『クリミア戦争』上・下、白水社2015年（原著2010年）。下巻150・151頁など。新式小銃の強力で重い円錐形銃弾による戦傷は「陰惨を極めた」、第一次大戦まで「史上最悪」と説明。ロシア軍外科医の回想記が引用されている。その陰惨さは、近代戦という想像を絶するものである。
- 111) 趙景達『異端の民衆反乱——東学と甲午農民戦争——』岩波書店、1998年、317頁。東学農民戦争の犠牲者数で、今も、もっとも根拠のある推定をしているのは本書である。日清戦争のなかで最大の犠牲者であることが明らかにされた。氏の犠牲者数推計は、今後の研究の土台になるはずである。「近代日本最初の本格的対外侵略史の解明という視角からの甲午農民戦争研究は、その全貌を解明する上でも、今後の重要な課題となってくるであろう」と、趙景達氏は述べている。
- 112) 拙著『明治日本の植民地支配——北海道から朝鮮へ——』225～227頁。
- 113) 「後備歩兵第十聯隊 陣中日誌」1895年4月28日、在釜山第1大隊長伊津野少佐よりの電報（千代田文庫「明治二十七八年役 第五師団陣中日誌 卷十五」1032頁）。「明二十八年 編冊陸軍省」「朝号外一六三七号」第五師団三上参謀長電報、陸軍省山内副官宛、5月2日午後1時着。
- 114) 「後備歩兵第十聯隊第一大隊 陣中日誌」1895年10月2日、10月6日、（千代田文庫「明治二十七八年役 第五師団陣中日誌 卷十五」1161・1162頁）。
- 115) 「後備歩兵第十聯隊第一大隊 陣中日誌」1895年10月19日、1076頁。これ以外の記載がない。
- 116) 「第五師団中路兵站監本部 陣中日誌」9月11日条「三」・今橋大隊長電報、9月12日条の「九」。
- 117) 同上陣中日誌、9月24日条の「一」。
- 118) 同上、陣中日誌、9月30日条の「六」。
- 119) 同上、陣中日誌、10月2日条の「四」。

120) 柏木一朗「日清戦争後に於ける台湾の治安問題 —— 雲林虐殺事件を中心に ——」『法政史学』48号, 127~129頁。

121) 年譜は、「今橋知勝年譜」(笹村鉄熊編『今橋將軍遺草』關幽会, 1931年)による。この資料(和歌集)の閲覧には、愛媛新聞社秦俊太郎記者の助力をえた。今橋少佐(当時)は、歌人でもあった。東学農民軍との戦いを詠んだ和歌が収録されている。「東学党の鎮定を、大本営に報告しける日。 あらびにし、高麗山おろし、音絶えて、のどかになびく、日の御旗かな」。1895年春の作であろう。壮絶な戦場、一方の総指揮官であった釜山兵站司令官の和歌の、現実感のなさには、一瞬、驚く。しかし、荒ぶるは、暴れるであり、「山おろし」は、「山から吹き下ろす風」である。「あらびにし、高麗山おろし、音絶えて」であるから、山岳に陣取って、駆け下りてくる、東学農民軍の大喊声が、鎮まった、という意味であろう。

一方、後備第19大隊長に任じた南小四郎は、1895年5月、南部兵站司令官と開城兵站司令官を命じられたが、同年12月7日、帰郷の命をうけた。53歳であった。少佐のまま、昇進することなく、1900年、後備役を退役した。(「明治三十三年十一月調製 履歴書 陸軍出身以来 陸軍歩兵少佐 南小四郎」前掲、山口県文書館所蔵南家文書)。

要 旨

日清戦争の際に，日本軍は，朝鮮各地において，数千人，数万人の勢力をもって抗戦する朝鮮農民軍に対して，包囲殲滅作戦を展開した。第2次の東学農民戦争，または甲午農民戦争，韓国では東学農民革命と呼ばれる。当時の日本公使館が農民軍指導部文書を組織的に奪取し，日本軍の公式日誌，「陣中日誌」も重要部分欠落などのために，現在も東学農民戦争の全体像は明らかでない。

東学農民軍を殲滅した大隊の一つが，後備第19大隊である。その第1中隊に従軍した徳島県出身の一兵卒の「従軍日誌」に，同大隊が実施した殲滅作戦最前線の実況が記録されていた。本稿前半では，京畿道利川の市内と近郊，忠清道可興北の平野にある東幕里，忠清道清風北の盆地，城内里で展開した作戦を，現地調査にもとづいて検証した。当初から殲滅作戦として実施され，銃撃戦も早くから戦われた。農民軍を捕縛，銃殺し，農民軍の拠点村落を焼き払う作戦であった。いわゆる北接農民軍が，主力の全羅道の南接農民軍へと合同，参戦したことも見聞して記されていた。

後半では，最大の激戦と言われてきた公州戦争の，その東側，錦江大渓谷における文義・沃川戦争が，公州戦争に劣らない大戦争であったこと，南原においては，農民軍拠点の城山と民家を重ねて焼き払う作戦を展開したこと，また南西部海岸地域における討滅作戦が，拷問，銃殺，焼殺，村の焼き払いと，いっそう苛酷に展開したことなどを現地調査も行って解明した。結びでは，後備部隊に徴兵された「貧困な兵士」群，苛酷な作戦における士官と兵士の社会史などを検討した。

キーワード：日清戦争，東学農民戦争，後備第19大隊

Summary

During the Sino-Japanese War, the Japanese Army aimed to annihilate the resisting Donghak Peasant Army. Based on our detailed fieldwork in Korea, we were able to reenact the military operations of the Japanese Army against the Peasant Army, as described in the Soldiers' Campaign Journal [従軍日誌]. Thus, we have verified the fact that the Japanese campaign was indeed one of complete annihilation, carried out in the city, as well as in the plains, hills, valleys, and mountain castles, by capturing and killing the members of the Peasant Army and burning their villages.

Keywords: Sino-Japanese War, Donghak Peasant War, 19th Reserve Battalion